

# 鎌倉の古代・中世文化と上田地方



信州大学附属図書館



<10>0020790564

市立信濃国分寺資料館

# 鎌倉の古代・中世文化と上田地方

上田市立信濃国分寺資料館

## はじめに

上田地方は鎌倉時代に北条氏の一族である塙田北条氏が居館を構え、国宝安楽寺八角三重塔をはじめ鎌倉期の文化財が数多く残り、「信州の鎌倉」と呼称されています。安楽寺を禅宗寺院に改めて開山した樵谷惟惣禪師と建長寺開山の蘭溪道隆禪師は親交があり、信濃に最初に禅宗が導入されました。こうした縁で上田市と鎌倉市は姉妹都市となり、現在活発な交流が行われています。

今回の特別展では、古代の鎌倉郡の役所である郡衙が推定される今小路西遺跡や、鎌倉幕府が置かれ、「中世都市鎌倉」として発展した鎌倉市内の大倉幕府周辺遺跡群、若宮大路周辺遺跡群や永福寺跡などの重要な遺跡から近年発見された土器、陶磁器、瓦、硯、木製品、金属器などの貴重な資料を多数展示いたします。

また安楽寺所蔵の樵谷惟惣禪師宛の蘭溪道隆禪師尺牘（書状）、樵谷惟惣禪師墨跡、国宝八角三重塔の部材や五分の一の精巧な模型などの重要な遺物を展示いたします。ところで源頼朝が善光寺参詣の帰途に、信濃国分寺の堂塔の修復を命じ、三重塔の建立を発願したと伝えられています。現在の三重塔は室町時代の建立と推定されていますが、塔の水煙・九輪・請花・垂木などが保存されており、こうした貴重な資料も展示いたします。

さらに上田地方の代表的な古代遺跡である信濃国分寺跡出土資料、鎌倉時代の居館跡が推定される浦田B遺跡、中世の城跡である塙田城跡、中世の経塚資料や埋納錢・陶器など中世の上田地方の重要な遺物も展示いたします。

こうした資料を通して、鎌倉の古代・中世文化と上田地方との関りについて、その一端をご理解いただければ幸いに存じます。最後に今回の特別展の開催に際しまして、貴重な資料をご出展いただきました鎌倉市教育委員会をはじめとする皆様方、ご指導、ご協力を賜りました関係各位、諸機関に対しまして、心より厚くお礼申し上げます。

平成20年9月

上田市立信濃国分寺資料館

## 目 次

「鎌倉時代の上田と鎌倉」	1	IV 遺跡・遺物からみる中世の上田地方	50
「発掘調査成果からみた中世都市鎌倉」	12	1 浦田B遺跡	50
I 遺跡からみた鎌倉と上田地方の古代	23	2 塩田城跡	55
1 小路西遺跡（鎌倉市）	23	3 法楽寺遺跡	56
2 信濃国分寺跡（上田市）	24	4 金剛寺御堂	58
II 遺跡からみた中世の鎌倉	26	5 中世の経塚	60
1 大倉幕府周辺遺跡群	26	(1) 観音平経塚	60
2 若宮大路周辺遺跡群	29	(2) 東紹屋村経塚	62
3 北条義時法華堂跡	32	6 中世の出土埋納銭	64
4 北条高時邸跡	34	(1) 上田市内と下郷地区出土の埋納銭	64
5 小路西遺跡	36	(2) 岩門地区出土の埋納銭	66
6 永福寺跡	38	(3) 塩尻地区出土の常滑大壺と埋納銭	67
III 鎌倉の建長寺と		主な特別展関係遺跡・寺院位置図	69
上田の安楽寺・信濃国分寺	41	展示資料目録	70
1 安楽寺と建長寺	41	引用・参考文献	74
2 蘭渓道隆禪師と権谷惟覺禪師の親交	44	「安楽禅寺所蔵 「蘭渓道隆書状」による消息」(1)～(6)	
3 国宝安楽寺八角三重塔の造営時期	46		
4 「源頼朝が建立を発願」と伝える			
信濃国分寺三重塔	48		

## 例 言

1. 本書は平成20年9月20日(土)から平成20年11月9日(日)までを会期とする特別展「鎌倉の古代・中世文化と上田地方」の展示概説として作成した。
2. 本書を作成するにあたり、多くの書籍を参考・引用させていただいた。厚く御礼申し上げる。なお、巻末の引用・参考文献の番号と本文中の文献番号は同一である。
3. 紙面の都合で展示資料のうち図録に掲載できなかった資料がある。
4. 本書の作成は当館職員が行った。なお、本文の執筆は「鎌倉時代の上田と鎌倉」が櫻井松夫氏（上田市文化財保護審議会会長）、「発掘調査成果からみた中世都市鎌倉」が小林康幸氏（鎌倉市教育委員会文化財担当係長）、「安楽禅寺所蔵「蘭渓道隆書状」による消息」が村上博優氏（龍洞院東堂）、第Ⅳ章2が川上元氏（大妻女子大学非常勤講師）、その他の解説文の執筆・編集は倉沢正幸（当館館長）が担当した。なお、経石に書写された經典については塩入法道氏（大正大学教授・信濃国分寺住職）の御教示をいただいた。

# 鎌倉時代の上田と鎌倉

上田市文化財保護審議会会長 櫻井 松夫

## I 都一西をむいた開発領主

### 地方武者の登場

公地公民の制や律令・格式によって世の中を治めた時代は、遠い遠い昔と  
なった12世紀中ごろのことです。都では、院政を始められた上皇が、当時  
の前例を変えて寵愛する皇子を即位させると、公卿の筆頭である摶政関白家では、跡を継がせ  
た惣領をうとみ、次男を大事にして、父と次男が惣領と対立して地位や氏長者を争う内輪もめを  
繰り返していました。それだけではなく、武士の棟梁である源氏も同じように、片方は父と庶子、  
もう一方は惣領である嫡子とが対立していました。人名を記すと、鳥羽法皇と崇徳上皇、藤原忠  
実・惣長と藤原忠通・源為義・義賢らと源義朝で、このように、天皇家・摶政家・武家の棟梁と  
いう国の政治の中心となる重要な地位の人たちが二つに分かれて争っておりますと、そこに仕え  
る人々も、おのずと二派に分かれて、どちらかに従うようになり、相手の派との対立や抗争が生  
じます。

保元元年(1156)の7月後白河天皇・藤原忠実・源義朝・平清盛らの天皇派と、崇徳上皇・藤原  
惣長・源為義・平忠正らの上皇派とが、存亡を賭けた大衝突をおこしました。この衝突を、時  
の年号をとって『保元の乱』と呼んでいます。この乱には、古代から中世へと時代が転換する目  
印となる重要でかつ決定的な現象が現れました。それは、この政治上の対立を決着させるために、  
両陣営とも名だたる武士に召集をかけ、弓や刀の力を借り、いくさを以て、勝敗を決めようとし  
たことです。結果は、後白河天皇・源義朝・平清盛方が勝ちました。

これが、時代の画期となって、保元の乱以後400年もの長い間、政治的問題を解決するのに  
「戦」という方法がとられ、その主役にずっと武士が登場し続けたのです。藤原忠通の子の天台  
僧慈円が、その著『愚管抄』の巻四で、「鳥羽院ウセサセ給イテ後、日本國亂逆ト云コトハオコ  
リテ後、ムサ(武者)ノ世ニナリニケルナリ(中略)。マサシク王・臣ミヤコノ内ニテカカル乱ハ、  
鳥羽院ノ御トキマデハナシ」と記している通り(傍線筆者)、新しい時代の始まりです。

『保元物語』には、都に駆けつけてこの合戦に参加した信濃武士の名が大勢記されています。『参考保元物語』等をもとにその名を記すと、崇徳上皇方には坂城の村上基国が加勢し、後白河天皇  
方の源義朝に従った武士には、根井行親・祢津貞直・海野・望月・舞田近藤武者などとりわけ東  
信濃の武士が名を連ね、京の東三条殿に集まり、賀茂川を越えて白河殿に夜討ちをかけて勝利を  
得る働きをしています。考えてみると、日常上田盆地や佐久平に暮らしている地方武士が、いく  
さ支度をし、家来を連れ、乗替馬を引いて、天皇と上皇が争う合戦に、京まで出かけていくって、  
夜討の軍勢に加わった、こんなことは信濃の武士にとっても、初めてのできごとです。

保元の乱のあと、平治元年(1159)に源義朝と平清盛とが争って、義朝が敗れ、平清盛とその一

族が政治の表に登場し、平氏全盛の時代をつくりましたが、武士が公家化し恣意的な面が強すぎたために、治承4年(1180)、ついに以仁王は令旨を以て東国源氏に平氏の追討をよびかけ、また地方武士が、表に登場する機会が訪れるのです

### 西に向いた開発 領主とその挫折

鎌倉幕府内の訴訟を裁く手引書とされた『沙汰未練書』という書物がありますが、その46項めに「御家人」とは、ずっと昔から開発領主であって、しかも、そこを將軍が所領として認めた「下文」を持っている武士のことだといい、開発領主とは、根本私領を持つ者のことであるとあります。たとえ、武士で所領があっても「下文」をもっていない者は、御家人ではないとも書いてあります。ですから、鎌倉時代に大手をふって歩ける武士であるためには、まず、昔からの開発領主の系統であることが第一の必要な条件でした。

土地を切り開いて私領の耕地にするには、古代からのひき続きで、開発しようとする場所を国司に申請して許可を受けなければなりませんでしたし、自然の川から自分で新しく掘った堰の水や池の水を用いなければならぬなりました。でも、誰でも堰の取り入れ口工事や大石・巨木の根を掘り動かせる鉄製の道具を持ち合わせてはいませんので、いきおい道具や労働力を持ってる富裕な上層農民により開発が進められ、開発者はますます私領が増加していくという繰り返しが生まれていた社会でした。

こうして生まれた開発領主は、開発の権限を拡大する過程で、国衙の役人や隣の領主と争いが生じやすく、その争いのために、自身も手下の者も弓や刀を持って武力をみがき、「武者」に成長していったのです。その一面は開発領主であり、一面は武者である人たちこそ、保元の乱に都へ駆け上った信濃武者たちだったのです。

保元の乱の首謀者たちは、こうして地方の開発領主を頼りましたが、開発領主の側からみると、利用されただけではありません。『玉葉』『吉記』『平家物語』『源平盛衰記』等、保元・平治の乱から治承・寿永の乱までの間の合戦の記事を読みますと、武士の苗字と本名との間に、「藏人」「瀧口」「兵衛尉」「衛門尉」「判官」「判官代」などの官途名を入れた武士の名乗りをよくみかけます。木曾義仲の配下になって京に上った村上三郎判官代安信や以仁王令旨廻國の使者源十郎藏人行家の例がそれです。藏人は天皇・院・撰閥等の秘書的な仕事、瀧口は内裏清涼殿北に控える宮中守護の武士、兵衛は天皇の護衛兵、衛門は内裏各門の守備兵、判官は国の役人の四等官、判官代は院や女院の守護兵というように、都の各機関の、勤めの職称です。

地方の開発領主にとって、このような都の官職は、たまらない魅力だったに相違ありません。何かよい伝はないものか、そこへ再び降って湧いたようなチャンスが訪れました。以仁王の令旨による木曾義仲の挙兵です。おそらく、一人残らずが西の空に夢を描いていたでしょうし、そして、実際に西を指して都へ上ったのです。

しかし、順いとは裏腹、結果は木曾義仲軍の壊滅であり、みじめな敗北におわりました。ある者は首を切られ、ある者は捕われ人となって預けられ、ある者は隠れました。頼みの開発所領も

勝者源頼朝による没収の憂き目に遭ったのです。塩田庄には頼朝の御家人島津忠久が地頭となつて睨みを利かせ、上田・小県のいすこも、沈滯と忍従の空気に包まれました。

## Ⅱ 武家の拠点鎌倉—東方に向きを変える

**都を離れ鎌倉に  
武家政治の基点** 治承4年(1180)の8月、源頼朝は、平家討滅の挙兵後石橋山敗戦の危機を房総にのがれ、東京湾岸を回って10月6日鎌倉に入り、同年12月12日、鎌倉市の大倉に新邸を完成させて、そこに移りました。お供をした御家人は、侍所の18の間に2列に対座し、その数は311人だったと『吾妻鏡』にあります。それから2年半、関東の地盤固めに力を注ぎ寿永2年(1183)の後半から平氏の追討と国内の制覇に乗り出し、元暦元年(1184)正月に先ず木曾義仲軍を壊滅させ、翌文治元年(1185)3月末平家を西海に亡ぼし、義経と行家の追討を命令し、そのことを理由に同年の11月29日に日本国惣追捕使・日本国惣地頭に任じられて、国内武士を統治する権限を獲得しました。そして、少し間をおいて、文治5年(1189)7月奥州の藤原泰衡を討って、日本国内すべての武士が源頼朝に支配されるところとなりました。

治承4年の12月、大倉の新邸に居を定めてからおよそ10年の歳月が流れています。この間、鎌倉では、頼朝の政務を行なう政所、御家人を統制し検断する侍所、御家人の所領争いそのほかの訴訟を裁定する問注所の三機関を組織して、御家人統制の万全をはかりました。

**西向きから東向  
きへの転換** 木曾義仲の配下だった信濃武士にとっては、3年半ほどの沈滯と忍従の歳月が流れました。文治3年(1187)の8月15日のことです。塩田の手塚太郎光盛の弟金刺盛澄は、捕えられて頼朝のご家人梶原景時に預けられていましたが、近く首を切られる身でした。流鏑馬の名人であったがために、斬首の前にその妙技を見ておきたいということになり、鶴岡の放生会に引き出されました。従二位頼朝と名だたる御家人列座の前で、躊躇の悪馬をあてがわれ、尺八寸の方形的、つぎには、五寸の竹串に挟んだ小土器、さらにその五寸の竹串のみ弔るしたと、極端に小さな物をいるよう難題を課されました。心中ひそかに諫訪大明神にいのり、駆け抜ける馬上から射る流鏑馬の的としては、誰の眼からみても無理的なをすべて射当てました。あまりの妙技に、頼朝は斬首を止め褒美を与える事にしましたが、金刺盛澄は、捕えられ預けられているかつての義仲配下の同輩60余人の赦免を願い、頼朝は、それを聞き届けてくれました。

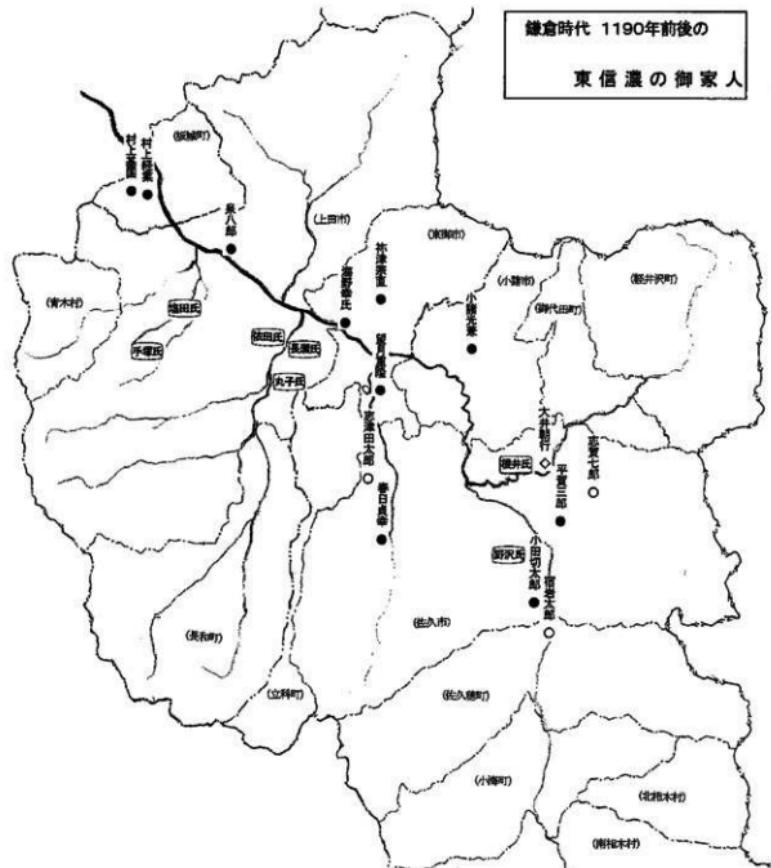
金刺盛澄の話は、『吾妻鏡』と『諫訪大明神画詞』とに記されている話ですが、源頼朝は、このあと、建久元年(1190)と建久6年(1195)の二度、京や京経由で奈良の東大寺へ西上しますが、四百近いその従者の中に多くの東信濃の武士の顔もあります。これらの中には、金刺盛澄が赦免を願ったおかげで許され、自分の開発所領を守ることができた者もいたはずです。

このような経験をへて、上田・小県の武士はもちろんのこと全国ほとんどの武士が、源頼朝の御家人になり、東の鎌倉を向いて暮らすようになりました。源頼朝の御家人にならないと開発所領の保持もむずかしく、守護や地頭になることもできなかったのですから、裏返すと、武士とし

て存在するのに、東を向かぬと生きられない世の中に変わったのです

### III 鎌倉御家人

**鎌倉時代初頭の東信濃の武士** 『吾妻鏡』建久元年11月7日条と同6年3月10日条を合わせ見て、鎌倉將軍家が都や奈良に上るとき、隨從した東信濃の武士をあげたのが、次の図です。隨兵の名簿から東信濃の武士をとりあげたのは、隨從した武士は、將軍家の御家人だからです。◇印は建久元年に隨從しただけの武士、○印は建久6年に隨從しただけ、●印は両度とも隨從している武士です。



中に氏の名を横書きにして長方形で囲まれた武士が書かれています。手塚氏・塩田氏・依田氏長瀬氏、丸子氏・根井氏(桶氏も含む)・野沢氏の7氏です。この武士は、木曾義仲に従軍した記

録はあるのに、義仲滅亡後は、建久の隨兵の記録にも各種の史料にも現れてこない武士で、おそらく諫訪盛澄の流鏑馬の事態が起きる以前に、処罰や処分を受けていた武士なのでしょう。

木曾義仲に従って京に上り、頼朝軍と戦って敗れた身なのに、鎌倉時代に入って建久の時代にもまた、頼朝に随從した氏に、海野氏・桝津氏・望月氏があります。この三氏は義仲の配下ではあったが、許されて御家人になった者たちです。

平賀氏は治承・寿永の乱のときから頼朝方に、村上氏は乱の中途寿永2年の11月に義仲から離れて頼朝方に従いました。

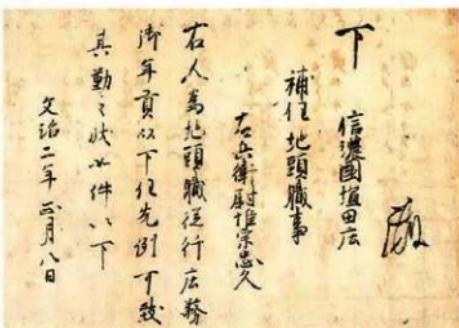
泉氏・志津田氏・春日氏・小諸氏・志賀氏・小田切氏・宿岩氏らは、治承・寿永の乱のときにはいずれの史料にもあらわれず、建久の隨兵名簿にはじめてあらわれるところをみると、義仲軍には参加しないでいて、天下の形勢がさだまつたところで鎌倉に出仕したのかもしれませんし、あるいは、ちょうどこのころ開発を進め、開発領主となり独立して、鎌倉の庇護を受けようとして出仕したのかもしれません。

このように、武士となって遭遇した運命はさまざまですが、いずれにしても、みな開発領主でした。開発されたところ、開発領主の居館のあり場所の共通点は、直接千曲川の水を引きいれるのではなく、その支流の小河川の水を引いて所領を開発していることと、その場所の標高が宿岩で750m、春日が760m、その外はみなそれ以下です。用水の取り入れ口構築の技術的限界や、当時の稲の品種と標高からくる稲作技術の限界を示しているように思われます。

鎌倉殿の御家人になると、開発所領の領有が保証され、庄園あるいは公領の郡・郷・村の地頭に補任されます。

地頭になると、その管轄すべき範囲の、下地を管理し、年貢を集めて領主に届け、管内の警察の役目、争いの裁判等の役割を果たしました。そして、このことを遂行する代償に下地の十一分の一の所領を地頭の取り分として認められました。歳月が過ぎ、地頭が老齢となるとその所領や権益を子供に譲与しました。格別の不始末のないかぎり、幕府はこの申請に基づいて安堵する、こうしたことを繰り返しました。

上田小県地方で地頭の補任状を残しているのは、島津忠久の塩田庄地頭補任状だけです。他は、残されている史料に、どの將軍から「下文」をもらつたとか、幕府の命に従つて仕事や負担をしている史料から、間接的に地頭に補任されているとみることができる武士がほとんどです。



源賴朝下文（東京大学史料編纂所所蔵）

## 御家人としてのつとめ

自分の開発所領を保証してもらい、さらに地頭職の取り分をもらえる、こうしたよいことの半面に、勤めなければならない仕事や負担がありました。これを御家人役といいます。

平素は、割り振られたとおりに出かけていって鎌倉将軍の宿直や警備、京都の警備や篝火焚きなどを勤めました。それから、将軍家がしようとした仕事、たとえば、火災にあった天皇の御所の造営・信仰するお宮やお寺の造営・都の川岸の修復・元寇のときに築いた博多の防壁などの費用と仕事を所領の大小に応じて負担をすることです。が、いちばんたいへんなことは、義仲や平家の追討、奥州藤原氏の討伐、文永・弘安両度の九州における元軍との交戦に催促があれば出向いて戦うことです。

長和町の有坂に所領をもっていた有坂弥次郎祐長もじっさいに博多まで出向して、竹崎季長らと共に元軍とたたかっています。戦いのために命を落とすことが生じても、それも、將軍のご恩に対する奉公の一つです。

## 六条八幡宮造宮役

京の六条、左牛牛に源氏の祖を祀る六条八幡宮がありました。このお宮は文治2年に敷地を広げて造営し、承元2年(1208)4月に火災に遭い翌年再建完成しましたが、それがまた文永11年(1174)に焼失してしまいました。これも御家人に負担を課しました。翌建治元年(1175)に負担額を記した「造六条八幡新宮用途支配の事」と題した記録ができ、佐倉の国立歴史民俗博物館に写しが所蔵されています。六条八幡宮造宮注文とよんでいます。用途支配とは、費用の割当分担を意味しています。地域的に、鎌倉中・在京・尾張以下33か国の国別に、記された御家人の数469人、負担の総額6,641貫(銭貨)という数にのほります。

六条八幡宮造宮注文に載る  
信濃國御家人の数は32人で、  
武藏国84人・相模国33人に  
つぐ3番目の多さです。32  
人のほかに、信濃国内に地頭  
職を持つ御家人塙田北条氏・  
小笠原氏・平賀氏・諫訪氏・  
小野沢氏・島津氏・大江氏系  
上田氏などもありました。

この内、上田小県地方の御

家人の負担額を記すと、海野

「六条八幡宮造宮注文部分」(国立歴史民俗博物館所蔵)

左衛門入道 10貫・浦野三郎跡 6貫・諫訪部入道跡 5貫の三人で、負担額は信濃国内の平均は5.34貫、北条一門13人を除いた全国平均は、10貫余ですから、信濃は比較的小規模領主だということになります。また、信濃国以外に主な所領を有する御家人は、信濃以外の国に載ってい

ます。この造宮注文は1230～40年代の御家人を基に負担を課されているとみられていますが、鎌倉中後期には、上記のほかに、加納田中郷の田中氏（後の白田氏）、国分寺南条の国分氏、伊豆の工藤氏の系の有坂氏、千葉氏系武石氏、藤原氏系塙川氏、山家郷の地頭等がいたはずです。林津氏もいたのですが記載されていない理由は不明です。

#### IV 鎌倉と上田

##### 武士の都一鎌倉

源頼義・義家・為義・義朝と続く長い時代、鎌倉が源氏の拠点となつてゐたといわれますが、農漁村的な風景の閑村でした。源頼朝が①の大倉に新邸を造り、幕府を開くようになってから次第に施設も町も通りも整備されていったのです。



図は、現代の地図に鎌倉の幕府の位置・鶴岡八幡宮、大路小路、鎌倉の入口を守る七か所の切通し、上田と関係の深い寺、上田に関わる人の館の位置等を書き込んだものです。

上田地方と関係の深い寺社・館

②は嘉禄元年(1225)北条泰時の執権時代に宇津宮に移された宇津宮幕府跡、③が源氏の氏神鶴岡八幡宮、④は段葛が築かれた若宮大路、⑤が小町大路、⑥が今小路です。鎌倉への入口を守る切通しは、⑦の名越の切通しを一回通っただけで、その役割を十二分に理解することができます。⑧の東奥に朝比奈の切通し、⑨が巨福坂の切通し、⑩亀ヶ谷、⑪が化粧坂、⑫が大仏、⑬が極楽寺の切通しです。

⑩は蘭渓道隆が開き、樵谷惟仙（惟龜に同じ）が上堂首座をつとめた建長寺、⑪が円覺寺、⑫は蘭渓道隆が後年に入寺した寿福寺、⑬は晩年の樵谷惟仙が住持となり、間もなく信州に帰ってしまった万寿寺、⑭は塙田北条氏が元弘3年（1333）北条氏滅亡の時に自害した東勝寺です。⑯と⑰は武士の邸宅跡で、⑯が北条義政邸跡、⑰が御内人諏訪氏の屋敷跡です。

石井進氏や河野真知郎氏が推計した当時の鎌倉の人口は、武士は変動が多いのですが3万人前後、僧侶など寺院の関係者が1万5千人、町屋住まいが3～4万人、計算は屋敷の広さや一軒の人数を仮定して算出しましたので幅がありますが、少なくて6万人、多くて10万人と述べています（『よみがえる中世』3）。

**上田の武士と鎌倉** 武士の譲状に、ときどき「鎌倉屋地」の一項をみかけることがあります。鎌倉常住か、鎌倉番役のため鎌倉に滞在するための家を所有したのでしょうか、くわしいことは分かっていません。

鎌倉時代における、上田の人々と鎌倉との結びつきを考えると、武士の鎌倉番役は入れ替わりながらずっと続いたし、鎌倉における行事にも当然参加しました。鎌倉との間を最も多く行き來したのは、おそらく海野幸氏でしょう。鎌倉殿の人質となった志水冠者義高の付人となって少年の時代から鎌倉に入り義仲滅亡後も引き続いて御家人として勤めました。特に名だたる弓馬の達人で、文治3年（1187）から嘉祐3年（1207）までの50年間に、12回、鶴岡八幡宮放生会の流鏑馬と御的始の射手に選ばれていますし、そのあとは流鏑馬作法の指導役にもなっています。

望月三郎重隆も、射手に選ばれること六度ですが、建久6年（1195）の放生会には、頼朝の弓や胡籠を捧持して、頼朝のすぐ後ろに従いました。武士の面目です。

小泉庄の地頭は北条得宗家だったでしょうし、上田庄も大江氏から霜月駿助を境に北条得宗の所領になっていたでしょうから、庄園管理を通じて行き来も多かったと推定されます。

源氏の將軍、摶家の將軍、親王將軍とかわり、北条氏の執権政治から御内人政治へと時代が移行するにつれて、幕府の主役をつとめる御家人も、移り変わっています。14世紀に入ると北条義政の嫡子国時・庶子時治が幕府引付頭人になりますので、塙田庄との往来も多かったと見られますし、小泉庄・上田庄では得宗家地頭代の行き来があったことでしょう。

**蘭渓道隆と樵谷惟仙** 上田の人と鎌倉人の最も濃い人間関係といったら、別所安楽寺の禪僧樵谷惟仙と中国（宋）から日本へ来て鎌倉建長寺を開創した蘭渓道隆との間でしょう。

樵谷惟仙が仏道修行のため最初に中国に渡って、宋で修行をしていた仁治3年（1242）のころ知り合い、同じ舟で宋から日本へ来ました。先学によって、樵谷惟仙禪師と蘭渓道隆禪師・安樂寺と建長寺についてはずいぶん研究されてきましたが、伝記の類いではなく、蘭渓道隆自筆の尺牘五点や書状の写し3点、合わせて八点の原史料を考察すると、これまでの見解を改めるべき重要な側面も生じています。その八点の原史料とは、

①普門寺の住持圓尔が建長寺に入った蘭渓道隆にだした建長初期の「圓尔書状」（真蹟）

- ②安楽寺が現蔵する上田市指定文化財の「仙兄首座禪師あて蘭溪道隆尺牘」(真蹟)
- ③奈良県北村繁樹氏蔵「蘭溪道隆墨蹟再留前堂首座上堂」(真蹟)
- ④川口市長徳寺蔵「前塙田方丈あて蘭溪道隆尺牘」(写し)
- ⑤東福寺靈雲院所蔵「安樂禪寺方丈几前あて蘭溪道隆書状」(写し)
- ⑥建長寺所蔵 宛先不記の「蘭溪道隆書状」(真蹟)
- ⑦松田福一郎氏所蔵 宛先不記の「蘭溪道隆書状」(真蹟)
- ⑧建長寺蔵「塙田安樂寺方丈あて蘭溪道隆書状」(真蹟)です。



国宝 開山大覚禪師(蘭溪道隆)像 (建長寺所蔵)

重文 木造惟僧和尚坐像 (安樂寺所蔵)

①は、圓爾が蘭溪の使者惟仙のことを仙郷人と記しています。その後の書状の宛先をみると、仙兄(惟仙兄)首座禪師・前塙田方丈・安樂禪寺方丈・塙田安樂寺方丈と変わっています。これらの書状には、どれも年号は書いてありませんので、筆者の推定です。しかし、史料の順は、④の長徳寺歳尺牘写しのなかには、年代考査の重要な鍵が二語隠されています。蘭溪道隆が寛元丙午(4年)博多に着いたとする建長興國禪寺碑文の双方を関連付けて、推定時代順に並べたものです。上記⑧点のうち安樂寺さんの②と、建長寺さんの⑧(写真資料)が当展覧会に出展されています。

#### ②安樂寺蔵「仙兄首座禪師あて蘭溪道隆尺牘」

道隆和南 今朝忽ちに聴く

首座 巳に它山の行に有り。使人棟歎已まず。縋いで

雖那處に於いて其の詳曲を詢るに乃ち云う。昨諸寮を巡るに因り寮暇を請う

者の辯堂を促さ令む。此の為其の中に怠慢有るの者、故（ことさら）に  
 之を警めんと欲す。庶（ひつし）くは堂中蕭索を致さず  
 首座等大頭首に係る、況や疾有り、並びに其の数に預からず。豈  
 堂司の一例の報示を期せんや。改めて首座を令て怒りを発し、破夏す  
 而して行くかしむ。此は是（これ）雜那の子細を明らめざるの咎なり。伏して望むらくは  
 首座 末代の叢林を以て念（ねん）と為し、此の小事を以て懶（けい）に繋ぐ勿れ。  
 今夕早々帰来せよ、凡そ好む所あらば、即ち當に面従すべし。冗（うう）中  
 詳布に及ばず。旁（わき）情（じょう）察（さつ）を汚（お）す

印

五月廿日

道隆和甫

仙兄首座禪師



安楽寺蔵 仙兄首座禪師宛蘭溪道隆尺牘



建長寺蔵 「大覺禪師語錄」(原田寛氏撮影)

蘭溪道隆が鎌倉で建長寺を開く努力をしていました建長3年(1251)のころ、椎谷惟仙は、蘭溪道隆の書状を持ち、京の圓爾に届ける使者をしていましたとみられています(①)。此の年、建長寺建立の事始を行い、建長5年(1253)に丈六の地蔵菩薩を安置して落慶供養を行っています。「大覺禪師語錄」の「塙田和尚至引座普説」は、おそらく椎谷惟仙が建長寺の前堂首座となって衆僧に紹介されたときの語録と思われます。すると、安楽寺蔵の蘭溪道隆尺牘は、當時建長寺に学びに集まつた衆僧が、あまり真剣に学ばない態度に怒りを覚え首座を放逐して他の寺へ行つてしまつたのですから、落慶後もなくの建長5・6年のことと推定できます(②)。

このあとどうなったか不明でしたが、幸い奈良県にある「再留前堂首座上堂」と題する墨蹟(③)によって、上記の尺牘にみる懇請に心を動かされて、建長寺の首座に再び戻つたことがわかるようになりました。

④長徳寺蔵の前塙田方丈あて尺牘は、文応元年(1260)のころ二人の間は疎遠になったことを推察させ、椎谷惟仙は再度宋に渡り、天童寺の別山祖智に参じています。14年宋で修行を続け、文永末年(1273-74)ころ帰国した椎谷惟仙は、別所の安樂寺を臨濟禅宗に改宗して再發足します

が、帰国後の二人の関係は、理由が分かりませんが、疎遠な関係は全く影を見せません。影を見せないだけでなく親密さと両者の信頼関係は絶対的なものに変わっています。

別所から蘭渓道隆に、おいしいお茶の大箱や薬になる杏仁、それに善光寺の花鉢等を送り、鎌倉の貿易船からの調達かと思われる大花鉢の入手を依頼したりしていますが、最深の信頼は建治2年(1276)3月、蘭渓道隆は別所まで出かけてきて20日間滞在し、4月安楽寺改宗開創に再来することを約束しました。甲斐の東光寺に流謫の身であったがために再来は実現しませんでしたが、安楽寺臨済宗開創にあたっての初代の開山を、招待開山として蘭渓道隆に委嘱したいと椎谷惟仙が願っていたことは、おそらく間違いないことだと思います。

蘭渓道隆は、建長寺へ三住して弘安元年(1278)7月、この世を去りました。

椎谷惟仙は、晩年鎌倉の万寿寺に転住しましたが、間もなく、また帰ってきたと記されています（『空華集』別宗建首座住信州安楽諸山疏）。

建長寺蔵の⑧の史料は、料紙一枚目の紙継ぎ目と宛先の「奉覆 安楽寺方丈」の料紙の間が抜けたまま貼り継がれています。追而書の部分には、おそらく画幅でしょう、依頼されて觀音の聖像と左右の韋馱天と龍像の語讚を書いて送ったことが書かれています。この史料は、安楽寺改宗開創前後のこととみられます、年代を推定できるような言葉が見当りません。

安楽寺の臨済改宗の年次は、従来建治3年のことだとされてきましたが、そうだとすると、⑤⑥・⑦の3通の書状の内容に不都合が生じます。改宗を従来の説より1年早めて、建治2年と解釈すると、不都合は氷解されます。よって、安楽寺の改宗開創は、建治2年とする見解が正しいのではないかと考えています。

すでに与えられた紙幅を少し超えました。鎌倉の蘭渓道隆と別所の椎谷惟仙の関係を詳述することは、上記のような概略の記述にしかなり得ませんが、紙幅の関係からお許しを請いたいと思います。

元弘3年(1333)、鎌倉幕府滅亡によって、南北朝期の上田と鎌倉の関係は、滋野氏一族を中心とする敵対の関係に移行します。

# 発掘調査成果からみた中世都市鎌倉

鎌倉市教育委員会文化財課文化財担当係長 小林 康幸

## はじめに

鎌倉市内における埋蔵文化財の発掘調査が、現在のようななかちで実施されるようになったのは昭和50年代に入ってからのことである。昭和30年代後半から40年代前半には市内で大規模な宅地造成等の開発事業が既に進み始めており、いくつかの発掘調査が大学等の手によって「やぐら」や寺院跡などを対象として実施されてはいたものの、行政組織のなかに文化財保護の担当部署が設置されたのは昭和46年のことである。これを契機に埋蔵文化財保護の具体的な対応として発掘調査がようやく確立することとなった。

その後、現在までの37年間に500箇所以上の地点で発掘調査が実施され、中世だけではなく各時代における人々の生活の様子が明らかになっている。これらの発掘調査の成果に基づいて主に古代から中世にかけての鎌倉の姿を紹介することとしたい。

## 中世以前の鎌倉

『吾妻鏡』は源頼朝が幕府を開く以前の鎌倉の様子を「所は素より<sup>へり</sup>邊鄙にして、海入野の外、ト居の類これ少なし」と記し、片田舎の漁村・農村であったような印象を与える記述をしている。この表現はその後の幕府成立以後の急速な都市化を印象付けるためにかなり誇張して記述したものであると考えられる。鎌倉は幕府の成立以後に忽然と都市が成立したものではなく、少なからず前代にも都市となり得るための一定の要件を備えていたことが発掘調査の成果から明らかになっている。

昭和58年から始まった今小路西遺跡(御成小学校地点)の発掘調査は、中世都市鎌倉の解明にも大きな成果をもたらした発掘調査であるが、同時に奈良時代から平安時代における鎌倉の様子を知る大きな手がかりとなった発掘調査である。中世遺構群の下層から発見された遺構は、大型柱穴を有する総柱式の長大な掘立柱建物が「コ」字形に配置された官衙的なもので、天平五年(733年)七月十四日の年号が記された木簡も発見された。この遺跡は調査成果から相模国鎌倉郡の鎌倉郡衙(郡家)跡と推定され、現在もほぼ異論のないところである。鎌倉郡衙の最終段階が10世紀初頭であるため、鎌倉幕府の成立まで250年以上の時間的空白はあるものの、古代以来、一定の繁栄があった土地であることがこのうち鎌倉が中世の首都となった理由のひとつと考えられるところである。

今小路西遺跡(御成小学校地点)の調査以後、周辺地点における発掘調査では常に奈良・平安時代の遺構にも調査者の関心が向けられるようになり、由比ガ浜中世集団墓地遺跡(由比ガ浜四丁目:平成3~4年調査)では10数軒の堅穴住居跡が発見され、また材木座町屋遺跡(材木座一丁目:平成12年調査)では8世紀前半の掘立柱建物6棟だけで構成される遺跡が発見されている。今後はこうした発掘調査の成果を再検証するとともに、それぞれの遺跡の成立要件と深い関わりをもつと考えられる古代東海道が鎌倉のどの場所を通っていたかという問題の解明が大きな課題となっている。

## 市街地における中世遺跡調査の進展

冒頭にも述べたように昭和40年代に実施されていた発掘調査の多くは、やぐら(山裾の岩盤を四角く掘り込んだ岩窟墓)や寺院跡といった遺跡であり、その所在地は市街地中心部から奥まった谷戸の中の遺跡であった。昭和50年代に入ると鎌倉の市街地中心部では商業ビルの建設や個人住

宅の建て替えが活発になり、発掘調査が急激に増加することとなった。鎌倉で中世遺跡の調査が十分に考古学的な研究対象となり得ることが認識され始めた昭和50年代には、全国的にも広島県福山市の草戸千軒町遺跡(港湾都市遺跡)、福井県福井市の一乗谷朝倉氏遺跡(飛岡城下町)、大阪府堺市(環濠都市遺跡)、福岡市の博多遺跡群、京都などに代表される中世遺跡の調査が急速に進み、いわゆる“中世考古学”が確立することとなった。同時に都市考古学なる言葉が登場したのもこの頃である。

鎌倉の中世遺跡にみられる遺構の最大の特徴は、地形という盛土と整地を同時に進行して地面を形成する土地の造成行為が繰り返し行われ、結果的に重層的な遺構を構成している点にある。異なる時代の遺構が同一レベルの地面に切り合いをもって形成される一般的な複合遺跡とは決定的に異なる点である。このため現在も相模湾に面し、海岸線が市街地の南側に立地している地理的条件にある鎌倉ではあるが、鎌倉幕府が作られた頃に相当する12世紀末の遺構は現地表面の約3m下に存在している。約800年の間に3mも地盤が上昇した状況である。

また鎌倉の市街地は現在も地下水位が高く、現地表面を1m程掘り下げるところがほとんどである。時として発掘調査が難航するほどに豊富な地下水の存在は、通常の土中では腐食して遺存することのない木製品を発掘調査の際、我々にもたらしてくれるものである。発掘調査で出土する木製品には華麗な朱漆で文様の描かれた漆器、箸や折敷といった食生活に関する道具だけでなく、生活のすべての場面に登場する遊戯具や道具類も少なからず含まれており、当時の暮らししづらが勞累とされる。

木製品の遺存は遺物としての出土品にとどまることなく、遺構においても大きな調査成果の提示につながっている。建物に使用された木材が柱や檻板として数多く発見されていることは言うまでもないが、良好な出土状況に恵まれた場合には、床板や壁板として具体的に建物の作られ方が判るような状況で木材が発見されている。数多く発見されている井戸にも支柱や檻板として木材が豊富に使用されており、また堀、河川の護岸などにも木組みの構造材が多用されている。中世鎌倉では木材や石材の大量使用によってかなりの水準で都市基盤の整備が確立していたことが判る。

#### 鎌倉に特徴的な都市遺跡の遺構・・・方形堅穴建築址

鎌倉の市街地における発掘調査が進むなかで、調査者はまったく新しい種類の遺構に遭遇することとなった。それは鎌倉で中世遺跡の調査に従事していた研究者の討議から名付けられた「方形堅穴建築址」という遺構である。方形堅穴建築址は地面を掘り込み、半地下式になるように床と壁を作った建物で、そのほとんどは平面形が正方形ないし長方形で、またカマドのような火を使う施設が皆無の遺構である。床及び壁には木材あるいは石材を使用している2種類の構造が明らかになっている。屋根をはじめとする地上の構造が明らかになった調査例はないが、中世の絵画資料を見ると「粉河寺縁起絵巻」などには人間が地上に近い位置で建物から顔を出している場面があり、これが考古学的に認識している方形堅穴建築址の姿のひとつではないかと考えられている。この建物は採光性が低く、地面からの湿気を受けやすいと想像されることから住居には不向きと考えられ、反面、重厚な石造りの壁や床をもつ事例があることから倉庫と見る意見が多い。

#### 海浜部の砂丘上における遺跡の認識

昭和59年に長谷小路南遺跡の発掘調査は、鎌倉市内の発掘調査において海浜部の砂丘上における遺跡の存在を明らかにした最初の大規模な調査であった。この調査を契機として砂丘という地理的条件下にも人々は生活を展開し、その痕跡が遺跡として現在も遺されていることが判明し

た。これ以前にも鎌倉の海浜部、砂丘地帯では人骨の大量出土が知られており、海浜部は主に墓地遺跡が所在する場所ではないかと考えられてきた。前述の方形堅穴建築址は砂丘上だけではなく、内陸部の遺跡からも発見されているが、海浜部に確認される方形堅穴建築址ではその出土品に特徴的な傾向が窺われている。鹿や牛などの大型哺乳類の骨を加工した骨製品やその製作途中の段階にある未完成品が比較的多く出土する傾向が強い。また一部には輪の羽口やスラグなど鋳造の痕跡を示す遺物が出土する例も少なくない。すなわち手工業生産に従事した職能民の活躍の場が海浜部であり、そこには海浜部(浜地)の権益とも関わる都市の姿が明らかになった。

### 武家屋敷と未解明の幕府跡

中世以前の遺跡として先に紹介した今小路西遺跡(御成小学校地点)の発掘調査は、中世の武家屋敷が発見された遺跡としても著名である。礎石建物の数や配置の状況、板張りの底部を有する溝や土壘、さらには六角形の井戸が発見され、また出土品には青磁、白磁をはじめとする高級な貿易陶磁器が大量に見られることから権力の中核に近い上級階層の武家の屋敷と考えられている。

今小路西遺跡ばかりでなく若宮大路の周辺でも武家屋敷と考えられる遺跡が発見されている。若宮大路の東側では北条小町邸跡(泰時・時頼邸跡)とされる遺跡であり、同じく若宮大路の西側では北条時房・頼時邸跡とされる遺跡である。今小路西遺跡は小学校の改築にともなって約9,000m<sup>2</sup>という大きな面積の調査であったことから、屋敷はもとより屋敷の周囲にあたる路地や庶民の居住区、町屋までを含めた土地利用の状況が明らかになったが、それ以外の武家屋敷推定地の調査はこれ程までに面積が大きくないため、屋敷の全体像を明らかにするには至っていない。なお北条小町邸跡とされる遺跡は有力な武家の屋敷であるばかりでなく得宗に権力が移行した時代の若宮大路幕府を含む遺跡である可能性が高く、その南側に隣接する宇津宮辻子幕府跡とともに単に武家屋敷の遺跡に留まるものではないことも留意される。残念ながら初期の幕府(大倉幕府)の遺構や将軍の御所についても具体的な遺構は現在も発見されていない状況にある。

### 寺院と墓地

鎌倉時代は文化的には、多くの高僧が輩出し新たな宗派も誕生した日本の仏教史上重要な時代である。寺院跡をはじめとする仏教関係の遺跡も鎌倉では多くの発掘調査が実施され、それらの具体的な姿が明らかにされている。

その代表的な遺跡が国指定史跡の永福寺跡である。永福寺は源賴朝が奥州平泉の地で目にした中尊寺大長寿院や毛越寺などの諸堂に感銘を受け、奥州合戦の際の戦没者の鎮魂を目的として建立した寺院で、創建は鎌倉時代初頭の建久年間である。国指定史跡の環境整備事業として昭和56年から平成8年まで実施された発掘調査によって、永福寺の全体像が明らかとなり、中心伽藍となる二階堂、阿弥陀堂、薬師堂、釣殿、泉殿、翼廊等の堂宇と苑池、橋の遺構によって構成される臨池伽藍(淨土庭園型式の寺院)の様相が判明した。永福寺跡の史跡整備が完了し、その姿を公開できる日も近い将来に実現しつつある。

永福寺跡以外にも、鶴岡八幡宮(寺)、建長寺、円覚寺、高徳院(鎌倉大仏)、光明寺、極楽寺、覺園寺など今日まで法燈を伝えている神社・寺院の境内及び旧境内を含む場所で発掘調査が実施されている。また現在は廃寺となった寺院跡についても東勝寺跡、仏法寺跡(五合桥遺跡)、北条義時法華堂跡などで発掘調査が実施されている。

埋葬に関わる墓地等の遺跡としては古くから「やぐら」の調査が実施されている。やぐらは山裾の岩盤に方形の横穴を掘削して作られた墳墓堂形式の墓で、被葬者は僧侶を中心とした者と考えられている。

やぐらに葬られなかつた人々の埋葬はどのように行われていたのであろうか。平成7年から平成9年にかけて実施された由比ヶ浜南遺跡の発掘調査は、中世人骨の大量出土として全国的にも注目を集めた。調査の結果、単体埋葬の土塚墓が約300基、集積埋葬と呼ぶ大量の人骨を一括埋葬した遺構(大型土塚)は約80基が確認されており、合計で3500体分の人骨が出土している。ここに葬られた個々の人間の死亡は必ずしも同時ではなく、その原因も一律ではないと考えられるが、中世鎌倉における人間生活の生々しい一場面である。埋葬地が海浜部のなかでも最も海に近い場所であった事実は、都市の構造や土地利用のうえで大きな意味を持つと評価されている。

### さまざまな生活遺物・・・消費する都市

「いざ、鎌倉」という言葉は戦乱の勃発時などの緊急時において、東国をはじめ諸国の御家人が幕府のある鎌倉に駆せ参じることを表現した言葉としてよく知られている。鎌倉は言わば各地の出身者が集まることで形成された都市であり、このことは人々の生活を支える物資の流通においても同様であった。発掘調査の成果からは鎌倉では生活用具である土器・陶磁器類は在地産のかわらけを除いてはほとんどのものが全国各地で生産されたもの、さらには中国・朝鮮で作られたものの搬入によって賄われていたことがわかる。生活用具に限らず、遺構を構成する資材となる材木も多くは伊豆や房総方面から調達されたものであったと考えられ、石材についても相模国内の西部地域や伊豆方面からもたらされていたようである。食料についてはそのほとんどが鎌倉以外の地から供給されたものである。海産物は地元で獲得されていた可能性があるが、穀物などについては鎌倉のなかには耕作地が見出せないことから、鎌倉の近郊ないしは周辺の地域から供給されていたものと推定される。まさしく鎌倉は物資を消費する都市であった。

### おわりに

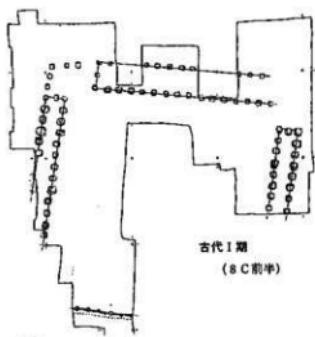
発掘調査の成果からみる鎌倉の姿を幾つかの事例から紹介した。今後も鎌倉では発掘調査が継続して実施される見通しであり、さまざまなかたちで中世の人々の暮らししづりが明らかにされることと思われる。今日、これまでに実施された数多くの調査の成果のとりまとめや分析によって都市鎌倉の姿について研究を深める段階に達している。地上に現存する文化財が極めて少ない鎌倉において、中世の鎌倉を理解するためには発掘調査によって明らかになった遺構・遺物から歴史の実像を検証し、描いてゆくことが唯一の方法であると言っても過言ではない。そうした視点に立つ時、発掘調査によって出土した膨大かつ多種多様な遺物を後世に伝えて行くことを目的として適切に管理し公開する施設、すなわち博物館の設置も鎌倉では急務となっている。鎌倉を訪れる方々には緑の山、青い海といった自然の景観だけでなく、地下に埋もれた歴史の真実、遺構や遺物にも関心を寄せていただければ幸いです。

### 参考文献

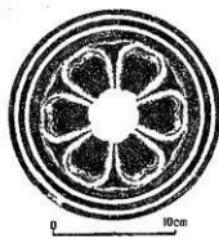
- 大三輪龍彦 1985『中世鎌倉の発掘』有隣堂  
大三輪龍彦 1985『鎌倉の考古学』ニュー・サイエンス社  
網野善彦・石井進・大三輪龍彦(編) 1989『武士の都鎌倉』(よみがえる中世3) 平凡社  
鎌倉考古学研究所(編) 1994『中世都市鎌倉を掘る』日本エディタースクール出版部  
河野眞知郎ほか 1994『月刊考古学ジャーナル』No.381(特集・中世都市鎌倉の考古学)  
ニュー・サイエンス社  
河野眞知郎 1995『中世都市鎌倉~遺跡が語る武士の都~』講談社(講談社選書メチエ49)  
馬淵和雄 1998『鎌倉大仏の中世史』新人物往来社



- A 大倉幕府跡  
B 政所跡  
C 北条泰時、時賴跡跡  
D 北条時房、頼時跡跡  
E 宇津吉辻子幕府跡  
F 若宮大路周辺遺跡群  
G 今小路西遺跡  
H 米町遺跡  
I 材木座町屋遺跡  
J 下馬周辺遺跡  
K 向原古墳群  
L 由比ヶ浜中世墓地遺跡  
M 長谷小路周辺遺跡  
N 由比ヶ浜南遺跡

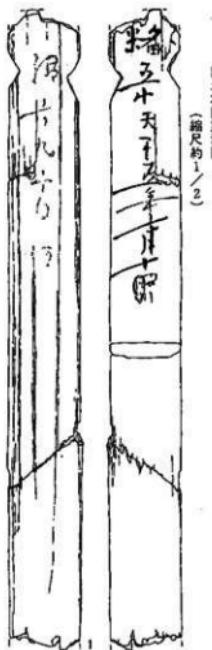


古代遺構の変遷

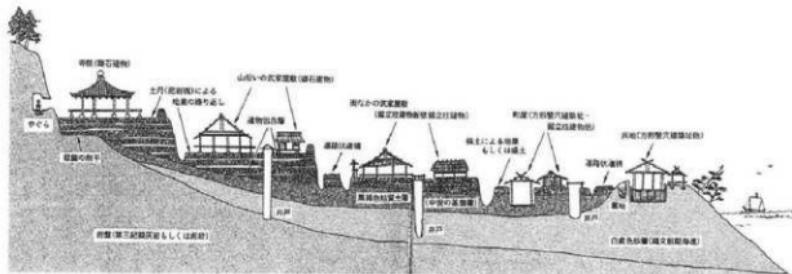


鎧瓦復元図

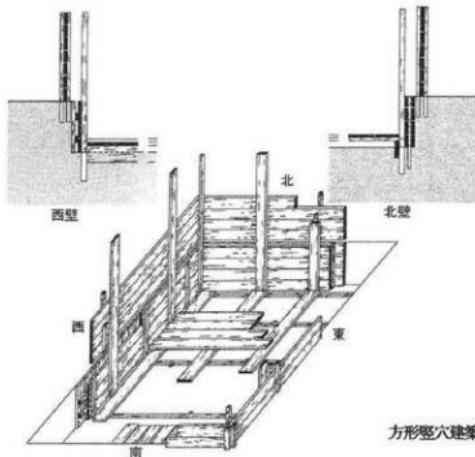
►春五十六年五月七日十四日  
相長丸子口



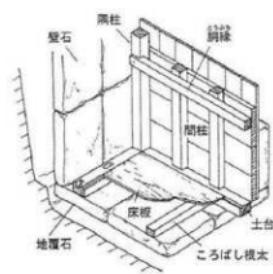
今小路西遺跡（御成小学校地点）



鎌倉の中世遺跡にみられる遺構



方形堅穴建築址



構造様式図

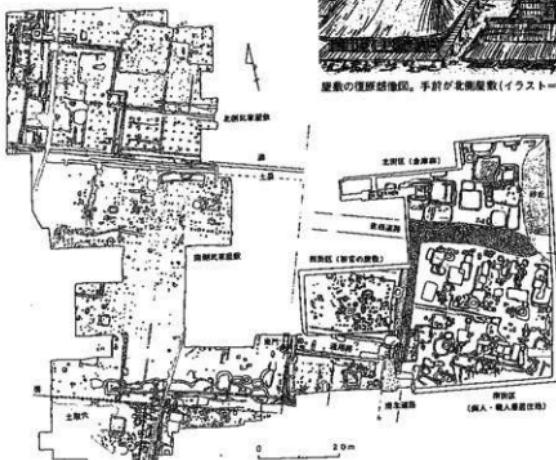


描かれた「平地下式」の様子(『柳河寺経起繪巻』模写)。

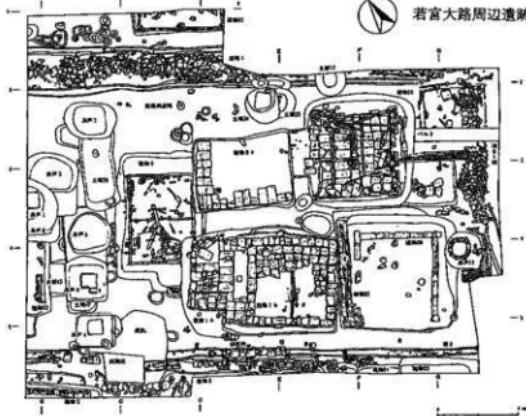
今小路西遺跡（御成小学校内）

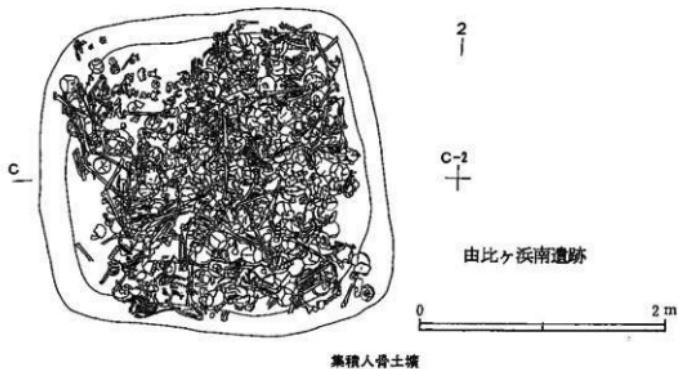
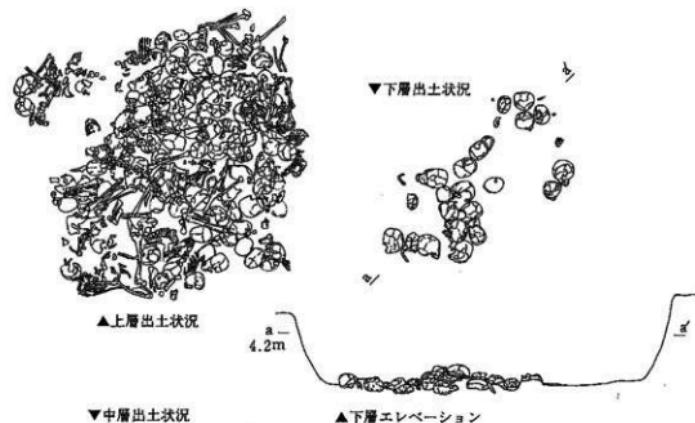
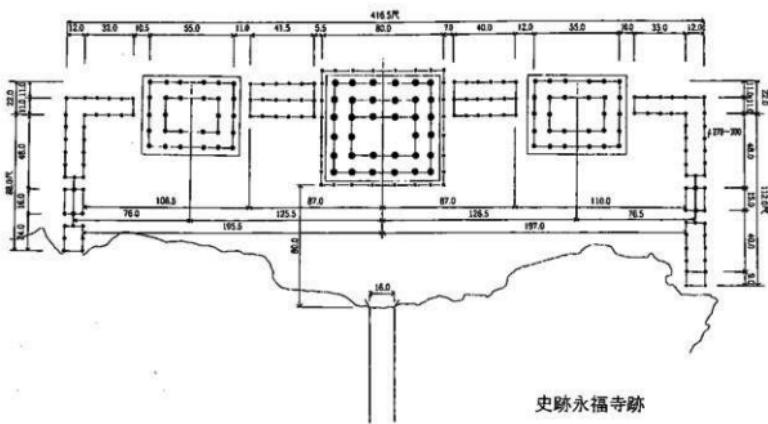


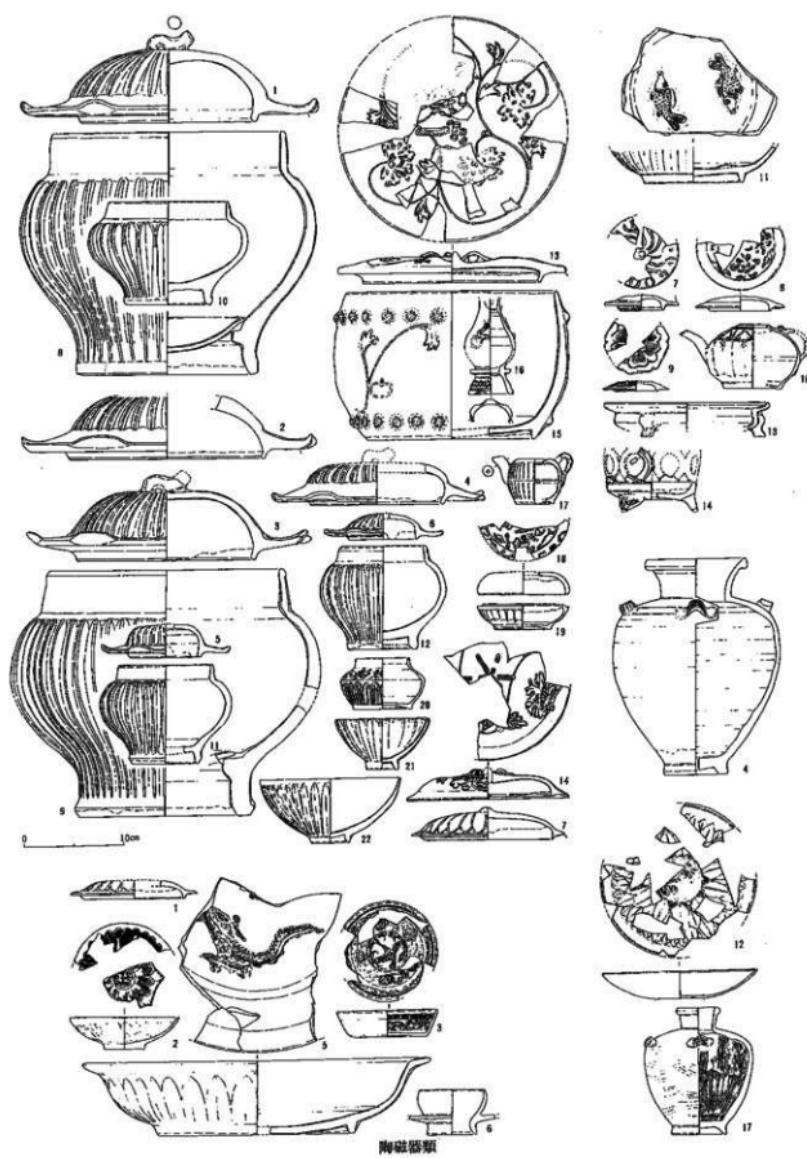
筆者撮影。手前が北側遺跡。奥が南側遺跡。



若宮大路周辺遺跡群



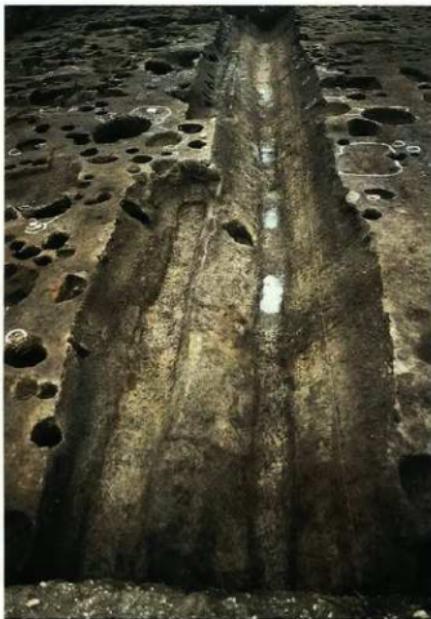




陶器類



鎌倉市大倉幕府周辺遺跡群発掘調査状況  
(平成 15 年度調査・鎌倉市教育委員会写真提供)



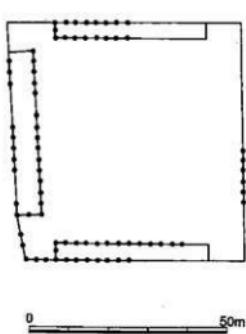
大倉幕府周辺遺跡群出土中世の溝  
(平成 15 年度調査・鎌倉市教育委員会写真提供)

# I 遺跡からみた鎌倉と上田地方の古代

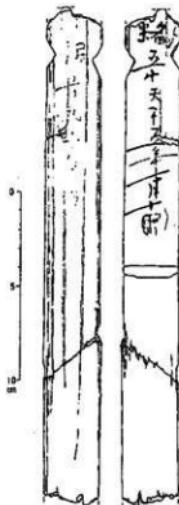
## 1 今小路西遺跡（鎌倉市）

鎌倉市御成町の市立御成小学校一帯を中心とする遺跡で、「今小路」という南北の通りの西側に当たる。奈良時代の相模國の鎌倉郡の役所である鎌倉郡衙（郡家）の政庁跡が発見（文献3・4・5）されて注目された。この政庁跡の遺構は8世紀前半から10世紀初頭までの5期の変遷が明らかとなっている。

1期（8世紀前半）は細長い庁舎を逆コの字型に配置したもので、政庁の規模は約50m四方であった。東辺、南西隅は檻（扉）で区画され、政庁西側の掘立柱建物は2間（6.3m）×15間（40.8m）程度あり、南北に長大な建物跡が確認された。2期（8世紀後半）は3間×9間の西側建物や四面廂付きの北側建物、南辺建物などが改築されて配置されている。3期（9世紀）にも大型の掘立柱建物跡が検出されたが、政庁域の移転も推測されている。5期には基壇上に総柱の礎石建物が南北に5棟配置され、政庁建物群の代わりに倉庫群を置き、10世紀初め頃には衰退したとみられている。



今小路西遺跡(相模國鎌倉郡衙)1期の政庁  
(『古代の官衙遺跡 II 遺物・遺跡編』  
奈良文化財研究所 2004年より引用)



今小路西遺跡出土木筒  
「糠五斗天平五年七月十四」  
「郷長丸子口口」  
(調査報告書より引用)

この郡衙跡からは古代の土器や瓦、木簡などの遺物が出土している。このうち木簡は「<sup>もつかん</sup>補五斗天平五年七月十四」、「<sup>さなづか</sup>郷長丸子□□」と記され、天平5年(733年)7月14日に輸(乾燥して貯めておく飯)を五斗(約90kg)、郡の役所へ郷長が供出する内容が記されている。なお、綾瀬市早川の宮久保遺跡からは「鎌倉郷鎌倉里□□・・」と記された天平5年9月の木簡が出土しており、この地域が古代から鎌倉郡の中心地であったことが推測されている。

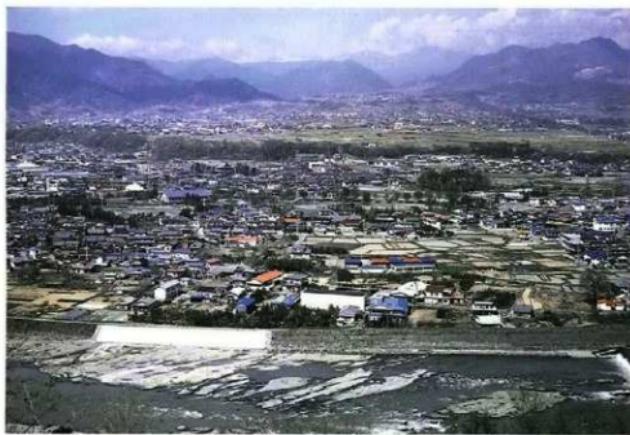
## 2 信濃国分寺跡(上田市)

国指定史跡の信濃国分寺跡は、上田市国分字仁王堂、字明神前に所在する。この信濃国分寺跡は千曲川を南方に望む第三段丘上にあり、この南側前方には古代の官道である東山道が推定されている。北方の一段上の第二段丘面には古代の信濃国分寺の伝統を受け継いだ天台宗の信濃国分寺が所在する。鎌倉時代の初めに源頼朝が善光寺参詣の帰途、信濃国分寺の堂塔の修復を命じたと伝えられ、信濃国分寺三重塔はこの際に建立され、現存する重要文化財の三重塔は室町時代に再建されたものと推定されている。

信濃国分寺跡は昭和38年から46年にかけて発掘調査(文献7)が実施され、僧寺跡と尼寺跡の伽藍の全容が判明している。僧寺跡は中門跡・金堂跡・講堂跡・回廊跡・七重塔跡・僧坊跡が確認され、これらの建物は100間四方(約177m)の築地で囲まれていたことが解明された。また尼寺跡は中門跡・金堂跡・講堂跡・尼坊跡・北門跡・経蔵跡などが確認され、これらは80間四方(約148m)の築地で囲まれていたことが明らかになった。平成16年には史跡保存整備事業に伴う発掘調査で僧寺南大門跡が確認され、間口3間(10.5m)、奥行き2間(6.6mもしくは6.9m)の大規模な八脚門であることが解明された。さらに平成18年には四脚門の僧寺西門跡が確認され、付近からは「七九六十三」と九九算を刻書した文字瓦が出土して注目された。

出土遺物は軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦・丸瓦・平瓦などの瓦類が多数出土し、土師器・須恵器・青磁碗・綠釉陶器・灰釉陶器・円面鏡・古鏡(和同開珎)・鉄釘などが発見された。このうち創建期の八葉複弁蓮華文軒丸瓦は、奈良市の東大寺・興福寺から出土した軒瓦と酷似し、平城京出土軒瓦の6235型式に分類されている。また創建期の均整唐草文軒平瓦は最近の研究(文献8)で奈良市の西隆寺付近から出土した軒平瓦と同范であることが解明され、6734型式C種に分類された。信濃国分寺跡から出土する創建期の軒瓦は、この文様のセットで98%程度を占めている。

この他に蕨手文・三重圓文・四葉單弁蓮華文・十二葉素弁蓮華文の軒丸瓦が尼寺跡から出土している。また軒平瓦は均整蓮華文軒平瓦が尼寺跡から出土しており、蕨手文軒丸瓦とセットになるとみられている。奈良時代の上田地方は東山道が通過し、信濃国分寺が建立され、現在の県庁に相当する信濃国府も設置されたとみられ、古代信濃の政治・文化の中心地であったと推測されている。



史跡信濃国分寺跡遠景（千曲川を南方に望む第三段丘上に所在）



八葉複弁蓮華文軒丸瓦（創建期）



均整唐草文軒平瓦（創建期）

## Ⅱ 遺跡からみた中世の鎌倉

### 1 大倉幕府周辺遺跡群

鶴岡八幡宮の東側にある大倉幕府周辺遺跡群は、大倉幕府跡(大倉御所)推定地を含む東西600m、南北350mの範囲とされている。大倉幕府は、政治の中心となった大倉御所が初代将軍の源頼朝(1147~1199年)によって造営された治承4年(1180年)から、四代将軍頼経が承久元年(1219年)に北条義時大倉亭の敷地内に新設された仮御所(二階堂大路仮御所)に入るまでこの地に所在した。この大倉御所については『吾妻鏡』(文献2)に御所が源頼朝の墓所である法華堂の下にあったとする記載や「東御門」「西御門」などの地名からこの所在地が推定されている。

大倉御所の建設に際しては、平安京などと同様に四神相応の地(東の青龍、西の白虎、南の朱雀、北の玄武の四神に相応じた最も貴い地相で、東に流水、西に大道、南に沼沢(海)、北に丘陵(山)のある地形をさす)が選ばれたとみられている。東の流水は二階堂川、西の大道は西御門に入る道、南の沼沢は由比ガ浜の海、北の丘陵は大神(臣)山との推定(文献9)がなされている。

これまでの調査により、青磁割花文碗・渥美壺・三鱗文(北条氏政所)の鉢など貴重な遺物が出土している。平成15年度の鎌倉市教育委員会による「南御門」地域の発掘調査(文献10)で、弥生時代中期から中世の遺跡群が確認された。中世の遺構は12世紀末頃の鎌倉時代から室町時代にかけての3時期のもので、建物跡・井戸跡・溝跡などが出土した。この調査では大量の「かわらけ」や「鐵冶」などの手工業生産を示す堆積が出土している。「かわらけ」は皿の形をした素焼きの土器をいい、食物を盛る食器としたり、酒を飲む杯として用いたり、火を灯すために油を入れて灯明皿として使用されたとみられている。

なお、鎌倉幕府の中心となる將軍の御所は、大倉御所・二階堂大路仮御所を経て執権北条泰時(1219~1251年)の主導で若宮大路東側の宇都宮辻子御所(現在は宇都宮稻荷が残存)に移り、嘉禄元年(1225年)から嘉



「一遍上人繪伝 卷5 (模本)」に描かれた鎌倉の町並み  
(東京国立博物館所蔵・複製禁止 Image:TNM Image Archives Source:<http://TnmArchives.jp/>)

元治 2 年(1236 年)まで所在した。その後將軍頼経が大病になり、その原因とされた土地の神の祟りを避けるためすぐ北側の若宮大路御所に移転し、嘉慶 2 年から正慶 2 年(1333 年)までこの地に所在した。当時の鎌倉の正確な人口については不明であるが、建長 4 年(1252 年)に幕府が鎌倉中の民家の酒壺を調査した結果、37,274 個あったと『吾妻鏡』に記されており、民家だけで約 1 万戸は存在し、仮に 1 戸 5 人とすると庶民だけで 5 万人はいたとの推測(文献 11)もなされている。また武士は 3 万人前後が鎌倉にいたと考えられており、人口は 6 万人から 10 万人とも推定され、中世都市として繁栄していた様子が推測されている。



大倉幕府周辺遺跡群発掘調査区全景（平成 15 年度）



せいじ けいわん  
青磁刻花文碗（12 世紀後半～13 世紀前半）  
(鎌倉市教育委員会写真提供)



大倉幕府周辺遺跡群 「かわらけ」 潜り



大倉幕府周辺遺跡群 手工業生産の跡  
(鎌倉市教育委員会写真提供)

## 2 若宮大路周辺遺跡群

若宮大路は鶴岡八幡宮の参詣道として、寿永元年(1182年)に源頼朝が妻政子の安産祈願のために造営した。当時の若宮大路の道路幅は現在の道路幅より広い33.6mあり、東西両側に幅3m、深さ1.5mの側溝が設置されていたことが発掘調査の結果から判明している。側溝は箱型状で木組み構造の堅固なものとされている。(文献12)

この側溝の外側には、道路の両側に並ぶ武家屋敷の墓地塚、板塚とみられる遺構が出土しており、こうした武家屋敷は原則として若宮大路に背を向けて、若宮大路には表門を建造しなかったとみられている。このことは若宮大路が一般的な道路ではなく、鶴岡八幡宮の神聖な参詣道として宗教的、儀礼的な道路であった(文献13)ことを示すものと推測されている。また戦争時の防衛線や火災の際にその拡大を防ぐ緩衝地として機能していたとみられている。

この若宮大路を中心に、若宮大路周辺遺跡群は東辺を小町大路、西辺を今小路、南辺を由比ガ浜通りに囲まれた、東西約500m、南北約1kmの遺跡である。この遺跡からはこれまでの調査で鎌倉時代の掘立柱建物跡、道路跡、溝跡、井戸跡などの多数の遺構が出土し、平成15・16年度の調査では武家の屋敷跡とみられる大規模な掘立柱建物跡(文献14)が出土している。

また平成17年度には、方形堅穴建築址(文献15)と呼ばれる堅穴の底に板や石を敷いてその上に角材を並べて柱を組む木組構造を用いた建物跡が、この遺跡からも出土した。この遺構は13世紀から14世紀にかけて建造されたとみられ、主として倉庫として使用され、一部は住居・工房・店などに用いられたと推測されている。出土遺物は「かわらけ」をはじめ、瀬戸水注・渥美壺・青磁・白磁・漆器・版本・鋳造に用いた鋳型・硯・砥石・石鍋・双六の駒・基石などが出土している。



鎌倉幕府の宗教的な中心であった鶴岡八幡宮



若宮大路周辺遺跡群発掘調査区全景（平成 17 年度）



井戸跡 7・9 （平成 17 年度調査）



主に倉庫として使用されたとみられる方形堅穴建築址（13世紀～14世紀）



瀬戸仏花瓶出土状態（平成 17 年度）  
(鎌倉市教育委員会写真提供)



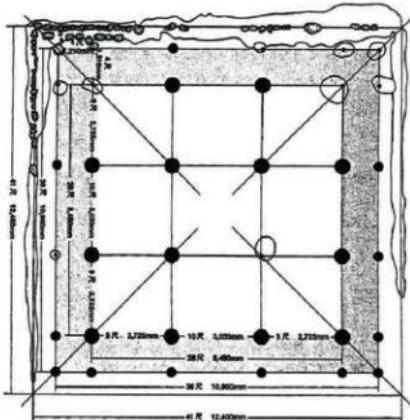
版木 (雀とみられる小鳥や竹などが陽刻されている。  
版木の用途の他に習作などの可能性も推測されている。)

### 3 北条義時法華堂跡

鎌倉幕府第2代執権の北条義時(1163~1224年)の法華堂跡(墳墓堂)は、源頼朝墳墓である国指定史跡の法華堂跡の東側の山の山腹に所在している。北条義時は北条時政の次子で、有力な和田氏を倒し、源実朝が暗殺された後には九条頼經を将軍に迎え、承久の乱に勝利して武家政権の優位を確立し「武家の古都鎌倉」の実質的な創始者とされている。



法華堂発掘調査区全景  
(平成 17 年度)



(「鎌倉の埋蔵文化財 9」鎌倉市  
教育委員会平成 18 年発行より)

建物本体 : Building  
軒範囲 : Eaves

平成 17 年度に鎌倉市教育委員会によりこの場所が発掘調査（文献 16）され、基礎上に建てられた礎石建物跡が出土した。残存していた縁の礎石と建物本体の礎石の抜き跡から一辺が 8.4m の正方形で、屋根の軒の出が 12.4m の規模の三間堂と推定されている。

元仁元年(1224 年) 6 月 18 日条の『吾妻鏡』には「前奥州禪門(義時)葬送す。故右大将家(頼朝)の法華堂の東の山上をもって墳墓となす」と記載され、「新法華堂」と号している。この建物跡が北条義時の法華堂であった可能性が高いとみられ、当時の執権の墓所を解明する上で重要な発見とされている。



法華堂発掘調査区近景



「かわらけ」出土状態（鎌倉市教育委員会写真提供）



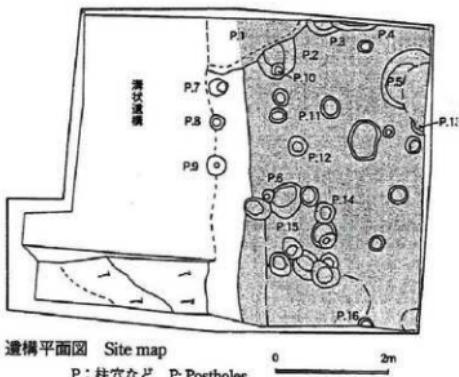
北条義時法華堂雨落ち溝出土状態（鎌倉市教育委員会写真提供）

#### 4 北条高時邸跡

鎌倉幕府第14代執権の北条高時（1303～1333年）邸跡は、鶴岡八幡宮の東南の宝戒寺とその周辺地域とされている。北条高時は北条貞時の子で、元弘3年（1333年）に新田義貞らの鎌倉攻めに際して、宝戒寺背後の山中の東勝寺で一族とともに自刃し、鎌倉幕府は滅亡した。

この鎌倉幕府滅亡に際して、信濃の塩田北条氏の国時・俊時父子も一族・郎等を率いて鎌倉へかけつけ、東勝寺とその周辺で戦闘に加わり、最後にことごとく自害をして果てたと伝えられている。「太平記」卷十の「塩田父子自害の事」では詳細に凄惨な自害の様子が描かれ、塩田北条氏はここに滅亡した。

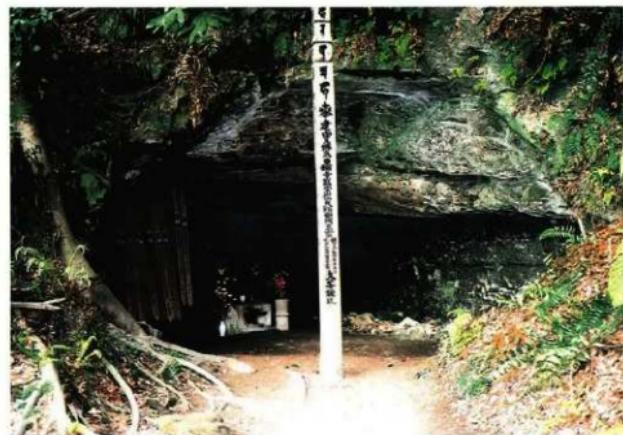
平成16年度に宝戒寺境内の南東奥で発掘調査（文献14）が行われ、13世紀から14世紀中頃の幅が4mを超える大規模な溝跡や、溝の西壁と調査区北側から多数の柱穴が発見された。こうした柱穴群は建物跡とみられ、さらに「かわらけ」や中国製磁器などの遺物が出土した。この大規模な溝は北条高時邸の敷地を画する大溝とみられ、高時邸の範囲を推定する上で貴重な発見とされている。



北条高時邸跡（『鎌倉の埋蔵文化財9』  
鎌倉市教育委員会平成18年発行より）



北条氏一族が立てこもり滅亡した東勝寺跡



「北条高時腹切やぐら」と伝えられる岩窟

## 5 今小路西遺跡

いそこうじじ

今小路西遺跡は、鎌倉市立御成小学校沿いの南北方向にある今小路の西側、東西約300m、南北約1kmの範囲の遺跡とされている。特に御成小学校一帯からは鎌倉時代後期の大規模な高級武家屋敷が南北2箇所で発見され、古代鎌倉都衙の遺構とともに注目された。

北側の屋敷は主屋とみられる大型礎石建物跡や大小の建物跡が十棟確認され、遺水、小苑池、六角形井戸などが配置（文献3・12・13）されている。出土遺物は最盛期の龍泉窯青磁や景德鎮窯の高級陶磁器が多数みられ、幕府中枢に近い人物の屋敷跡とみられている。ただしこの屋敷は火災を受けており、13世紀後半には衰退したと推測されている。また南側の屋敷も3,600平方メートルの高大な敷地をもち、主屋の大型建物跡や小型の従属的施設がみられた。これらの屋敷の門前には家臣の屋敷や職人・庶民の建物、街路などが発見され、中世都市の極めて良好な遺構とされている。

平成15年度に行われた市役所北側地点の発掘調査（文献14）では、12世紀末から14世紀前半にかけて4時期の中世遺構面が出土した。特に第2遺構面からは多数の中国製磁器の破片が出土し、第3遺構面からは大規模な池が発見され、武家屋敷の一部と推定されている。この池からは船形・独楽などの木製品や木製クグツ人形のカシラなどが出土し、操り人形を使用した雑芸を行な人々の存在が推定されている。また昭和59年、60年の発掘調査では、瀬戸黒釉壺や銅製水滴などの遺物が出土している。



今小路西遺跡出土の大規模な武家屋敷跡（鎌倉時代後期）



平成 15 年度発掘調査区全景（池と護岸・第 3 面）



平成 15 年度発掘調査遺物出土状態（池・第 3 面）  
(鎌倉市教育委員会写真提供)

## 6 永福寺跡

永福寺跡は鎌倉市二階堂字三堂付近を中心とし、源頼朝が奥州平泉の藤原氏を滅ぼした後戦死者の慰靈のために、平泉の大長寿院の二階大堂を模して建立を発願している。永福寺は「二階堂」と号されており、地名の二階堂の由来とされている。文治5年(1189年)12月9日条の『吾妻鏡』には「今日永福寺の事始めなり」と記されており、このときに創建が決まり、建久3年(1192年)には本堂の二階堂と庭園が完成した。本堂を中心に北側に薬師堂、南側に阿弥陀堂の脇堂が建ち、三棟の建物が並ぶ配置であり、地名の三堂はこれによるとみられている。

永福寺は鎌倉時代には將軍の御願寺として鶴岡八幡宮寺、勝長寿院とともに幕府の保護を受け、別当や供僧は幕府主催の法会に参加し、鎌倉幕府直属の重要な寺院としての役割を果たしていた。なお、永福寺は室町時代も鎌倉五山の上位に位置付けられ、15世紀前半までは確実に存続していたことが明らかにされている。

三堂の前には発掘調査（文献13・16・17）で庭園遺構が発見され、苑池には中島や立石が配され、橋がかけられていたことが判明している。建物正面の山からは経塚が発見され、外容器の渥美大甕、内容器の銅製經筒、念珠、經典の残欠などが出土し、12世紀末から13世紀初頭の遺物とみられている。周辺からは八葉複弁蓮華文軒丸瓦、均整唐草文軒平瓦、陶磁器、かわらけなどが多数出土した。周辺の山を含む御籠跡が国史跡に指定されて公有地化が図られ、現在史跡整備事業が鎌倉市教育委員会によって進められている。



永福寺の遺構配置図（「史跡永福寺跡解説パンフレット」鎌倉市教育委員会より）



ようふくじ  
永福寺薬師堂跡



ようふくじ  
永福寺の苑池跡  
(鎌倉市教育委員会写真提供)

鎌倉市内出土遺物



青磁魚文皿（口径 10.0cm）  
(藤内定員邸跡・12世紀後半～13世紀前半)



青磁算木文香炉（高さ 9.5cm）  
(妙長寺裏遺跡・13世紀後半～14世紀前半)



いんばん  
印判（刷面）  
縦 5.3cm、横 4.8cm の大きさで、印面  
に宝塔と、左に「勸進中道寺建立」右に  
「合法華文字百口」の各 7 文字を陽刻。  
(佐助ヶ谷遺跡・13世紀後半)



遊戯具  
トンボ（長さ 14.2cm）  
(佐助ヶ谷遺跡・14世紀  
後半～15世紀初頭)

(鎌倉市教育委員会写真提供)

### III 鎌倉の建長寺と上田の安楽寺・信濃国分寺

#### 1 安楽寺と建長寺

上田市別所温泉の安楽寺は、国宝八角三重塔によって広く知られており、天長年間(824~834年)の開創と伝えられている。かつて別所には三楽寺(長楽寺・安楽寺・常楽寺の名称に楽のつく三寺院)があり、そのなかの一つとされている。

安楽寺が文献にみられるのは鎌倉時代前期からで、鎌倉の建長寺を開いた有名な關漢道隆禪師が「別所安樂寺方丈」にあてた手紙などから両寺の深い関係が推測されている。この安樂寺方丈は、建治3年(1277年)に安楽寺を臨済宗に改め、開山となった椎谷惟惣禪師とされている。

安楽寺の所在する塩田地域は、「信州の学海なり」と鎌倉時代にはいわれており、仏法を学ぼうと志す人々が当時塩田に大勢集まっていたとみられている。これは南禪寺の開山大明國師(無<sup>む</sup>闇<sup>あん</sup>普<sup>ふ</sup>門<sup>もん</sup>)の碑銘(「大明國師無闇大和尚塔銘」応永7年(1400年)建立)に「信州に却回して塩田に館<sup>くら</sup>す、乃ち信州の学海なり」とあり、多数の修行僧が仏教文化の水準が高い塩田に集まり、仏法を学んでいたと推測されている。大明國師が塩田で修行したのは鎌倉時代前期の1220年代とみられ、椎谷惟惣禪師が安楽寺を臨済宗に改めたり、北条義政が塩田に入る建治3年より50年ほど前に、すでに仏教文化が常楽寺などを中心に塩田で興隆していた様子がうかがわれる。(文献20・21)

建長寺は鎌倉市山ノ内に所在し、臨済宗建長寺派の本山である。正式名称は建長興國禪寺で、山号は巨福山である。鎌倉五山の第一位とされ、建長元年(1249年)に北条時頼の発願によって創



安楽寺 (上田市別所温泉)

建されている。開山は蘭渓道隆禪師で、それ以後は蘭渓道隆門派の大覚派の本拠として隆盛した。歴代の住持には無学祖元など名僧がみられ、鎌倉五山全体の中心寺院であった。(文献 22)

執権北条貞時の頃には幕府から五山の称号を受け、延慶元年(1308 年)には定額寺に列せられている。暦応四年(1341 年)には室町幕府によって五山の第一位となり、以後建長寺は鎌倉五山の第一位を常に維持している。たびたび火災にあって建物が焼失し、江戸時代前期の正保 4 年(1647 年)、徳川家光が仏殿・唐門を芝の増上寺より移して復興した。宝曆五年(1755 年)には三門、文化 11 年(1814 年)には法堂(講堂に相当)が再建された。寺宝には開山大覚禪師像(蘭渓道隆画像)・蘭渓道隆筆規則・梵鐘(建長 7 年鋳造)などが国宝に指定され、建物・彫刻・絵画・書などの重要文化財も多数保存されている。



蘭渓道隆禪師尺牘（安楽寺所蔵・上田市指定文化財）



椎谷惟庵禪師墨跡  
(安楽寺所蔵)



重文 木造惟儼和尚坐像（安樂寺所藏）



国宝 開山大覺禪師像  
(建長寺所藏・原田寛氏撮影)



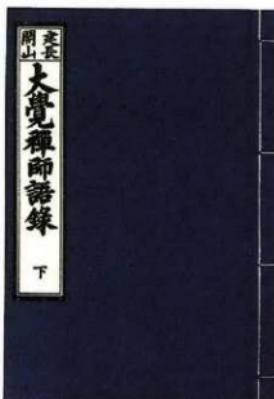
建長寺（鎌倉市山ノ内）

## 2 蘭溪道隆禪師と樵谷惟儼禪師の親交

蘭溪道隆禪師(1213~1278年)は中国宋出身の臨済宗の高僧で、鎌倉時代の寛元4年(1246年)、門弟の義翁紹仁、竜江応宣などと来日したが、同じ船に樵谷惟儼禪師(後に安楽寺開山)があり、この頃には両者の間に親交があったとみられている。蘭溪道隆禪師は博多・京都を経て鎌倉に入り、北条時頼の招きで鎌倉の常樂寺、ついで建長元年(1249年)に創建された建長寺の開山となつた。正元元年(1259年)には京都の建仁寺の住持(住職)となつてゐる。その後文永2年(1265年)には建長寺の住持に再度なつたが、中国元の使節が来日して朝貢を要求すると元の間諜(スパイ)との嫌疑を受け、甲斐の東光寺に流されている。数年後、再び鎌倉に戻り寿福寺の住持となつたが、文永11年頃に再び甲斐に流され、ついで陸奥の円福寺に移り数年を経て鎌倉の寿福寺に戻つてゐる。弘安元年(1278年)、4月には三度目の建長寺住持となつたが7月には病氣で亡くなつてゐる。死後、北条時宗によって大覺禪師の称号が贈られている。(文献23)

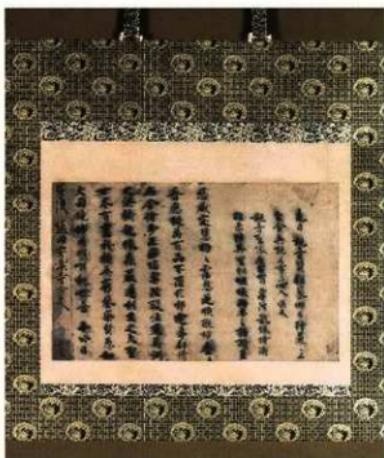
蘭溪道隆禪師の遺著「大覺禪師語錄」には、塩田和尚(樵谷惟儼)が建長寺を訪問した際に、建長寺の学僧達に樵谷惟儼を紹介した時の説法がある。それによると「塩田長老には宋から帰つて来た時に随分厄介をかけた」、「建長と塩田とは、各々一つの寺に拠つてゐるが、それぞれ百人余、五十人余の僧が集まつて、仏法や禪道を学ぼうと願つてゐる」、「建長と塩田とは進むべき道は一つであり、それに向かって直行しなければならない」、「袈裟衣の一角に塩田和尚の像さの一端でもいいから裏に入れて持ち帰ることにより、信心を具そうとする人に、塩田の塩の厚味を識らしめることが必要である。もしその厚味を知りたければ塩田和尚に請いて学ぶがよい」など両者の親交を物語る文言がみられる。(文献20・21)

安楽寺には蘭溪道隆禪師が樵谷惟儼禪師に宛てた尺牘(書状)が保存されているが、その内容は早く建長寺へ来て首座(座禅修行の首位の僧)の役をつとめてほしいと依頼したものであり、苦境の際にも互いに助け合つてゐた様子が窺われる。



『大覺禪師語錄 下』  
(建長寺所蔵・原田寛氏撮影)  
塩田和尚(樵谷惟儼禪師)と  
蘭溪道隆禪師の親交がうかが  
われる。

「大覺禪師語錄 下」  
(建長寺所藏・  
原田寅氏撮影)



蘭溪道隆禪師尺牘  
(建長寺所藏・原田寛氏撮影)  
安樂寺の樵谷惟覺禪師に宛  
ての書状。

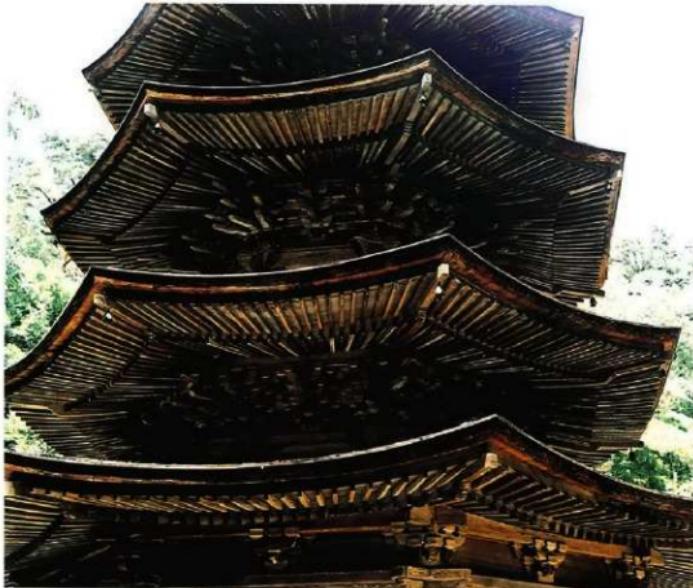
### 3 国宝安楽寺八角三重塔の造営時期

上田市の安楽寺八角三重塔は全国で唯一の平面が八角形の三重塔であり、昭和 27 年に国宝に指定された。本格的な禅宗様式の手法や安楽寺の歴史からこの三重塔の建立年代については、鎌倉時代末期から南北朝時代と幅のある解釈がこれまでなされてきた。が、平成 16 年 11 月に三重塔部材の年輪年代測定法による調査結果が奈良文化財研究所古環境研究室の光谷拓実室長の分析に基づいて発表された。それによると塔の主要構造材の一つであるヒノキ材の海老虹梁えびこうりょうは正應 2 年(1289 年)に伐採されたことが判明し、三重塔は鎌倉時代末期に完成した可能性が高くなかった。

国立歴史民俗博物館名譽教授の濱島正士氏は「安楽寺三重塔は 1290 年代に完成したと考えられ、仏堂をはじめ禅宗様の全遣例のなかで建立年代が明確なものとしては最も古く、日本の禅宗様建築を考えるうえできわめて重要な位置を占める」(文献 24)と述べられている。

鎌倉時代中期の建治 3 年(1277 年)、鎌倉幕府で連署をつとめた北条義政が塩田に入り、館を塩田に構えている。この塩田北条氏の援護により安楽寺は興隆に向かったと推測されており、本格的な禅宗様建築の安楽寺八角三重塔造営に際しては塩田北条氏の存在が大きかったとみられている。

なお、平成 16 年 9 月から信濃国分寺資料館展示室に、上田市別所温泉在住の宮大工棟梁、西島敏雄氏制作の安楽寺八角三重塔の精巧な模型(安楽寺所蔵)が展示されている。高さ約 4.3m の実物のおよそ 1/5 の大きさの模型で、総ヒノキ造りである。屋根や窓の部分が一部取り外した状態になっており、八角三重塔の構造を細かく内部までうかがうことができる貴重な模型とされている。



国宝 安楽寺八角三重塔(安楽寺所蔵・鎌倉時代後期)



国宝 安楽寺八角三重塔の内部



安楽寺八角三重塔模型（西島敏雄氏制作・安楽寺所蔵）

#### 4 「源頼朝が建立を発願」と伝える信濃国分寺三重塔

上田市国分の信濃国分寺は、承平8年(938年)の平将門の乱で兵火にかかり衰退したとみられ、その後現在の北方段丘上に移転したと推測される。鎌倉時代初期には、源頼朝が善光寺参詣の帰路、信濃国分寺の衰退をみて堂塔の修復を命じたと伝えられている。現在、重要文化財に指定されている三重塔は高さが約20.1mあり、建築様式より室町時代初期から中期の建立とみられている。なお、江戸時代の塔修理の際には建久八年(1197年)の墨書きがあったとされ、普光寺を修築した源頼朝が信濃国分寺三重塔の建立を発願した可能性は高いと考えられる。

三重塔の外部は和様を主とした和禅折衷様式で、内部は純禪宗様式となっている。塔の内陣には大日如来が安置されている。昭和8年(1933年)には塔の全面解体修理が実施され、その際に室町時代の相輪部が交換された。この修理の際には三層西北梁隅木に焼痕があり、これは永禄・天正年間に兵火にかかった痕跡とみられている。この兵火の際には三重塔を除いて信濃国分寺の建物は全焼したと伝えられている。

全国の国分寺の中で塔が重要文化財に指定されている事例は、この信濃国分寺三重塔の他に、岡山県総社市にある備中国分寺の江戸時代建立の五重塔のみであり、全国的に貴重な建造物とされている。



重文 信濃国分寺三重塔（外部は和様）



三重塔水煙（室町時代）



信濃国分寺三重塔相輪の名称



禅宗様式の三重塔内部と大日如来



信濃国分寺三重塔菊花と桿管 (室町時代)

## IV 遺跡・遺物からみる中世の上田地方

### 1 浦田B遺跡

浦田B遺跡（文献25）は、上田市築地の浦野川と産川が合流する地点南側の河岸段丘上に所在している。平成8年に圃場整備事業に伴う発掘調査が、上田市教育委員会によって実施された。その結果、弥生時代後期から中世前期の遺構が発見され、特に南地区では整然と配置された掘立柱建物跡群や溝跡・井戸跡・土坑跡などが確認され、鎌倉時代の領主層の館跡と推測されている。

この中世前期の遺構は、長さが約33m、幅が約2mの中世の第3号溝跡より北方にあり、3期にわたる遺構の変遷が認められた。特に3期には最大規模の掘立柱建物跡が出現し、主屋とみられている。その近くには副屋と推測される掘立柱建物跡3棟や檻で囲まれ床面に竪穴を持つ厩の可能性が考えられる建物跡1棟が確認された。近くには下人・所従と呼ばれた人々が住むとみられる小規模な建物跡があり、飲料水や生活用水を供給した井戸跡なども確認され、上田地方で最初に発見された鎌倉時代の武士層の館跡と推定される。

また屋敷の南限を画する第3号溝跡とともに西側にも同様の溝跡が一部確認され、最終的には一辺が50mから60mの溝で囲まれた方形の屋敷地をもつ館と推測された。この溝跡は人頭大の石を底に敷いたり、組み合せた庭園風の池状遺構や、鉄器を砥石で研いだ作業用水場とみられる遺構と連結していたと推測され、仕事や生活の場となった当時の館の具体的な状況がうかがわれる。

出土した遺物は、中国銅錢・土師質土器・瓦質土器・須恵質土器・陶磁器・台石・砥石・鉄滓や、井戸跡から木材とナツメ・モモの種子などが見つかった。

中国銅錢は小破片を含めて23点確認され、「祥符元宝」（初鑄年1008年）1点、「天聖元宝」（初鑄年1023年）2点、「皇宋通宝」（初鑄年1039年）2点、「熙寧元宝」（初鑄年1068年）3点、「元豐通宝」（初鑄年1078年）4点、「元祐通宝」（初鑄年1086年）1点、「紹聖元宝」（初鑄年1094年）2点、「聖宋元宝」（初鑄年1101年）1点、「大觀通宝」（初鑄年1107年）2点、「政和通宝」（初鑄年1111年）2点の10種類の銭種が確認された。こうした銅錢は第3号溝跡から18点が出土し、また掘立柱建物跡の柱穴からも3点が出土し、柱を据える際の地鎮祭祀との関連も推測された。

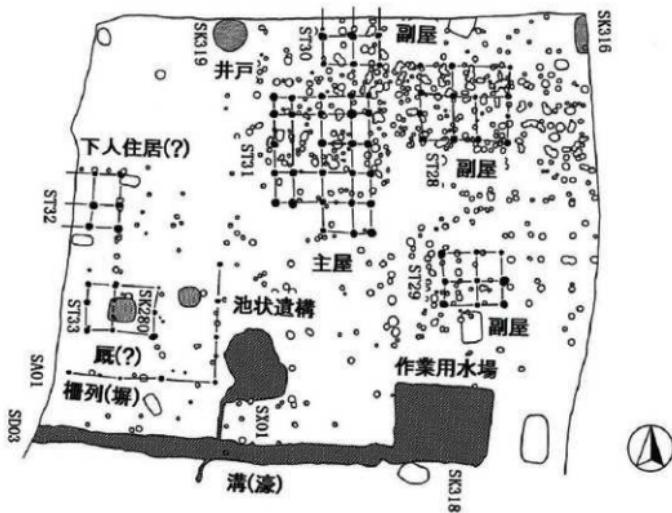
青磁は中国の龍泉窯産の輸入磁器があり、この浦田B遺跡では壺形合子・蓮弁文碗・碗・皿などが認められた。土師質土器は「かわらけ」と呼ばれる皿や、珠洲瓦質土器の擂鉢が出土した。須恵質土器では在地系と珠洲系のものが出土し、珠洲壺の破片が認められる。陶器は常滑壺や古瀬戸のおろし皿の小片が出土した。こうした陶磁器は12世紀後半から14世紀前半までのもので、その出土量から13世紀を中心とみられている。

こうした中国銅錢や当時の高級陶磁器がこの河川に挟まれた浦田B遺跡から出土したことは、この地に勢力を持つ有力な領主が河川交通を重視して、活発な経済活動を行い、また自衛のため河川を堀として利用していた可能性が推測される。

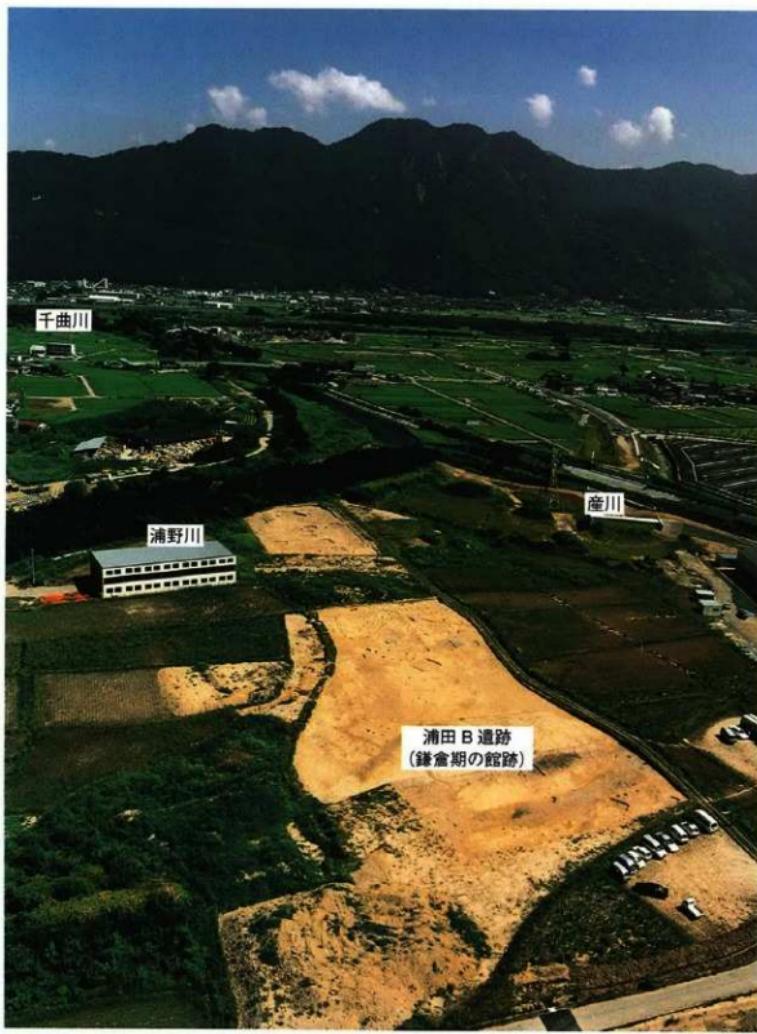
この地域は中世では小泉荘となり、地頭で源頼朝の御家人となった泉氏の有力な根拠地とされている。泉氏は当初築地字堀之内や吉田字宮脇地籍を開発し、現在の七社宮(七柱神社)の地を館としていた可能性が、土壘や東側の堀跡(幅1.5mから2m、深さ約1mでV字形を呈す)を検出した近年



鎌倉時代の屋敷跡とみられる掘立柱建物群  
(上田市築地の浦田B遺跡)



領主層の館（屋敷）と推定される13世紀から14世紀前半の遺構



上田市築地の浦田 B 遺跡発掘調査状況

浦野川と産川に挟まれた浦田 B 遺跡では、鎌倉時代の領主層の館跡とみられる遺構が検出された。中国龍泉窯産の輸入磁器や珠洲・常滑・古瀬戸などの陶磁器類は、河川を用いた活発な経済活動が行われていた可能性を推測させる。

の発掘調査成果から推測されている。この神社の現在の社地は東西 30m、南北 50m 程度で、東・南・西側に土塁が残存し、北側には矢竹の林が認められる。その後、建暦 2 年(1212 年)、源頼家の造営榮実を擁立して源氏再興の挙兵を試みたものの未遂に終わった泉親衡いずみちかひらがこの泉氏とみられ、泉氏はこの事件で館や所領、地頭職を失い、築地の北方の浦田地籍うらたぢきを新たに開発して、そこへ館を造営した可能性も推測されている。(文献 21)



館跡の南方を画する第 3 号溝（濠）跡



人頭大の石を底に敷いたり、組み合せた庭園風の池状遺構

なお、中世の築地は「津井地」と称されていたことが、嘉暦4年(1329年)の諏訪上社の五月会、御射山の祭りの当番を記した「諏訪上社頭役注文」により知られる。この地名は河川の津(船の着く港・船着き場)のそばで、井戸を有した浦田B遺跡の状況とよく合致しており、築地が中世の河川交通で発展したことを見出す興味深い地名と考えられる。



出土した中国銅錢・輸入磁器・国内産陶器



第3号溝跡から出土した中国銅錢の出土状況

## 2 塩田城跡

塩田城跡は、上田市街地の南に展開する塩田平のほぼ中央部にそびえる独鉛山(1034m)の一支脈である弘法山の北山麓面にあり、塩田平を一望できる位置にある。山腹の南北約700m、東西の最大幅約180mの斜面には、20数段に及ぶ大小の段郭(帯郭)が確認され、眼下の東前山集落一帯を根小屋とした広大な中世城館跡が想定される。

塩田の地を治めていた塩田北条氏が、鎌倉幕府滅亡時の正慶2年(1333)に一族をあげて鎌倉に至り宗家のために殉じた後、塩田平は坂木を本拠とした村上信貞の領地となったことが記録に見える。村上氏は室町中期以後、この塩田城に重臣の福沢氏をおき、前線基地として長い間統治してきたが、天文22年(1553)甲斐の武田信玄の侵攻によって、この城を奪われてしまう。武田氏は、ここに飯富氏を常駐させ信濃経略の拠点としていたが、天正10年(1582)武田氏自身の滅亡により、廃城となってしまうのである。

この塩田城跡に発掘調査のメスが入れられたのは、昭和42年(1967)ごろからで、「空堀跡」の規模や構造、山麓中腹に位置する「虎の口」と呼ばれる一帯の石積遺構・井戸跡などが順次確認されてきた。とくに昭和50年から三ヵ年をかけて実施した、「吉十平」と呼ばれる段郭平坦面の本格的な発掘調査では、礎石を伴う5間×5間の建物跡・溝跡・敷石遺構・土坑構造や、それらに伴う豊富な遺物が確認された。主な遺物としては、皿・鉢・内耳鍋などの土器質土器、珠洲土器の壺、常滑系の大甕・瀬戸系天目茶碗などの陶器類、中国製の青磁・白磁・青花などの磁器類、さらに銅鏡・笄・小柄・刀子・鉄鏃・鎧・鉄釘などの金属製品、硯・砥石・石臼などの石製品、また塗物・油物・将棋の駒・人形・箸状木製品・建築部材などの木製品などがあげられる。なお、塩田城が機能した時期は、渡来の磁器類や常滑・瀬戸系陶器類などの年代から、およそ室町時代後期と推定するに至ったのである。(文献26)



塩田城跡出土  
の建物跡全景



塩田城跡出土中国青磁



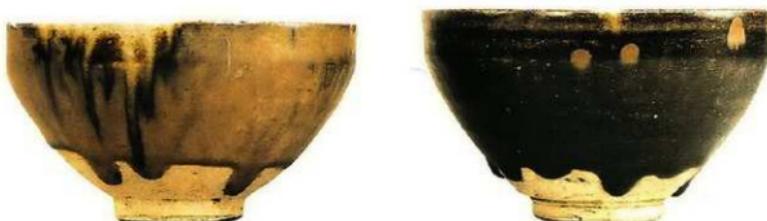
塩田城跡出土刀子（上）・鐵鎌（下）

### 3 法楽寺遺跡

上田市殿城字法楽寺を中心とし、法楽寺遺跡（文献27）は、開発事業に伴い平成7年から10年にかけて発掘調査が実施された。その結果、約47,000平方メートルが調査され、縄文時代から中世までの遺構・遺物が多数発見された。このうち奈良・平安時代には200軒を超える堅穴住居跡や平安時代後期の金銅三尊仏・磬（吊り下げて打ち鳴らす仏具）が発見され、大規模な集落内に平安時代には寺院が存在したと推測される。その後鎌倉・室町時代には地籍名の法楽寺が示すように、引き続いて寺院が存続し、墓域となった可能性が推測されている。

中世の遺構としては一般の住居跡はほとんどみられず、墓とみられる墓坑(掘りくぼめた墓穴)が多くみられる。住居は鎌倉時代には竪穴住居から掘立柱建物に変化したと推測される。墓坑の平面形は長方形や不整形で、礫や石積みを伴うものが多く、この上部には本来五輪塔が建立されていたとみられる。五輪塔の石材は多孔質安山岩製が多く、106点の部位が出土している。その形状より鎌倉時代末期から室町時代初頭の14世紀第2四半期に五輪塔の建立が始まってこの地域は墓域になり、16世紀中頃まで建立され、最も盛んに建立されたのは15世紀代から16世紀初頭と推測されている。

出土遺物はカワラケ・擂鉢・白磁合子・古瀬戸皿・鉄袖天目茶碗などが出土している。また平安時代後期製作とみられる金銅三尊仏・磬などの仏具は中世寺院においても引き続いで礼拝・使用されていたと考えられる。中世の法楽寺については文献などで確認はできないが、調査地の周辺には「堂下」・「茅御堂」などの地名もあり、寺院建物が存在した可能性が高いと推測される。



法楽寺遺跡出土鉄袖天目茶碗



法楽寺遺跡出土金銅三尊仏（左）・磬（右）

## 4 金剛寺御堂

上田市住吉の金剛寺地区は、長野県史跡の砥石城跡が東方に位置し、中世の遺物が各所から出土している。平成8年には小字御堂の畑地から青磁蓮弁文碗1点・漆塗りの木製碗2点・人骨1点などが出土して注目された。(文献28)

このうち青磁蓮弁文碗は蓮の花弁が胴部外面にあしらわれ、中国南宋時代の龍泉窯で生産された青磁とみられる。こうした青磁は鎌倉時代にわが国に盛んに輸入され、形状から鎌倉時代後期の遺物と推測される。その他に土師質小皿・宝鏡印塔相輪片・鉄製鎌などが出土し、この地に中世の墓所があったと推定されている。

近くの洞源寺境内には貞治2年(1363年)、永和五年(1379年)の南北朝時代の銘をもつ宝鏡印塔の塔身が残存している。こうしたことからこの墓所は、鎌倉時代後期から南北朝時代の14世紀代のものと推測される。

また金剛寺地区の個人の屋敷地内からは中世の内耳土器片・香炉片などとみられる土師質土器片が昭和52年に出土している。この屋敷地は北側に土壙跡とみられる場所があり、東側には村上義清と関係する「義清水」と伝承される井戸がある。こうした土師質土器は砥石・米山城跡が東方にそびえ、中世の防衛集落とも推測される金剛寺地区から出土した貴重な中世の遺物と考えられる。なお、平成19年3月、金剛寺地区出土のこれらの遺物は、宮原友則氏、田中和夫氏から当館に寄贈され、展示されている。



青磁蓮弁文碗などが出土した御堂地籍  
(上田市金剛寺地区)



青磁蓮弁文碗など  
出土地点（御堂地籍）

- ① 城代屋敷  
(屋敷の中心地と推定)
- ② 土星跡
- ③ 向い屋敷
- ④ 義清井戸
- ⑤ 現五輪塔祭祀地
- ⑥ 洞源寺
- ⑦ 玉藏寺跡
- ⑧ 薬師堂跡
- ⑨ 石造五輪塔出土地
- ⑩ 生活用水の沢川
- ⑪ 矢出沢川

金剛寺の城代屋敷周辺地籍図  
(文献 28 より引用・一部改変)



御堂出土青磁蓮弁文碗（鎌倉時代後期）



御堂出土土師質小皿（鎌倉時代後期）

## 5 中世の経塚

### (1) 観音平経塚

上田市の北方に隣接する坂城町の観音平経塚は、坂城字観音平の鏡台山南麓に位置し、農道の建設に伴って発見された。昭和 54 年には発掘調査が行われ、平成 4 年には上信越自動車道の建設に伴い、長野県埋蔵文化財センターによって、発掘調査（文献 29）が実施された。その結果、経塚は東西 15m、奥行は最大 2m で、山裾斜面を削り出して造成したテラス状の平坦面に築かれていた。扁平な頁岩砾を用いた経石は厚さ 30cm 程に集積され、下部に大きめな経石が、上部に小形の経石が積まれていた。なお、経塚上方の斜面には五輪塔群が 7 群確認され、合わせて 413 点の五輪塔の各部材が出土している。こうした五輪塔群はその形状から 14 世紀第 2 四半期から 16 世紀前半頃と推定されている。

経石集積の直下には火葬骨を納めた 2 基の墓坑が発見された。特に 2 号墓坑は経石集積の中央にあり、65cm × 60cm、深さ 30cm 程の墓坑に扁平な川原石を組み合わせた石椁状の施設を造り、その中に草創期の古瀬戸四耳壺（12 世紀後葉）が納められていた。さらに墓坑全体を覆うように 60 × 50 × 10cm の大形板状石が蓋状に置かれていた。この経石集積と墓坑は一体のものと考えられ、被葬者の葬送儀礼に伴って砾石經が埋納されていた。

経石は1,609点が出土し、このうち202点が判読され、判読されたものはすべて法華経であった。また文字列として認識できるが内容は判読できないものが125点あり、このうち31点は法華経でないことが確認されている。経石は大部分が扁平な角縁を使用しており、多数の文字を記した多字一石経であった。文字の形状から10種類の筆跡が識別され、特に4名が主体となって写経をし、この人々は法華経の序品から第二十八品まですべてを写経したと推測されている。経石は一面が経文で埋まると隣の面や裏面に統いて書写され、一つの経石に連続して法華経の一部分が記されていた。また一つの経石に二品にわたって法華経が書写された例が、14例認められている。

この経塚の築造年代は、出土遺物や経石の形状からみて12世紀後葉から14世紀第1四半期の可能性が高いとされ、鎌倉市内の墓に伴う多字一石経の事例から14世紀第1四半期の築造と推定されている。このため当初に山裾斜面の末端部に経塚が墓坑とともに築かれ、その後上方に墓域として次々に五輪塔群が築かれた様子がうかがわれる。こうした経塚や五輪塔群は坂城を本拠地とした村上氏に関係した遺跡と推測されている。



観音平経塚（下方の集石）と五輪塔群



古瀬戸四耳壺（12世紀後葉）  
経石集積の直下の墓坑に埋納  
されていた壺。



観音平経塚出土経石  
(長野県立歴史館写真提供)



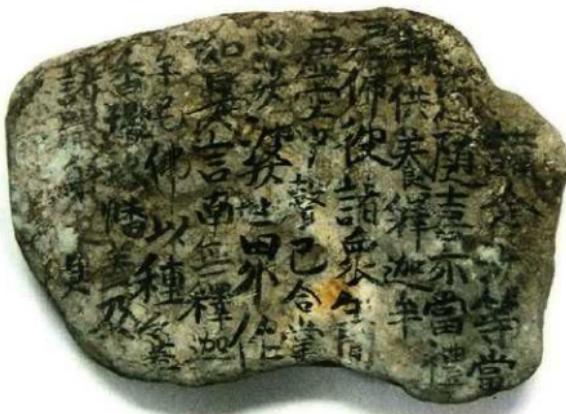
観音平経塚出土経石（部分）

## (2) 東紺屋村経塚

上田市手塚の東紺屋村経塚は、昭和 53 年に住宅地の工事作業中に発見され、発掘調査（文献 30）が実施されている。この経塚が発見された場所は西塙田地区の産川第一段丘の端部で、かつて手塚村の「日就学校」という小学校があり、その校庭跡とされている。この場所はそれ以前、地蔵堂跡、海善寺跡とも称されており、付近に寺院があったとみられている。

調査の結果、地表下約 20cm の地点で、扁平な径約 30cm の川原石が 2 枚重ねに敷き並べられており、経塚の石組み造構の蓋石であることが確認された。この蓋石の下には東西 1.0m、南北 12m の長方形の石組み造構があり、その内部には径 10cm から 15cm 程度の扁平な川原石に墨を墨書した経石が多数認められた。この石組み造構は川原石を周囲に横積みにして深さが約 60cm あり、経石の集積底部には石敷きはみられず、そのまま地面となっていた。

出土した経石は多字一石經で、合計 2,762 点が確認された。写経された経典は法華經で、表裏に書写された経文は連続性がなく、別の箇所の経文であった。また筆跡も同一人物ではないとみられ、複数の人々によって最初に一面に書写され、その後墨が乾いてから裏面に別人によって写経されたとみられている。この経石の墨書きされた文字は中世的な書体であり、また経塚の石組み造構の底部からは中世とみられる土師質土器が 1 点出土しており、経塚が築かれた時期は中世に遡る可能性が指摘されている。



東糀屋村經塚出土經石

上田市手塚

東糀屋村經塚出土經石

護念汝等當

深心隨喜亦當禮

拝供養釋迦牟

尼佛彼諸衆生聞

虛空中聲已合掌

向娑婆世界作

如是言南無釋迦

牟尼佛以種々華

香瓔珞幡蓋及

諸嚴身之具

及諸四衆恭敬圍繞釋迦牟尼佛。既見是已。皆大歡喜得未曾有。卽時諸天於虛空中高聲唱言。過此無量無邊百千萬億阿僧祇世界有國名娑婆。其中有佛。名釋迦牟尼。今爲諸菩薩摩訶薩說。大乘經。名妙法蓮華教。善薩法佛所護念。汝等當深心隨喜。亦當禮拜供養釋迦牟尼佛。後諸衆生聞虛空中聲已合掌向娑婆世界作如是言。南無釋迦牟尼佛。南無釋迦牟尼佛。以種種華香瓔珞幡蓋及諸嚴身之具珍寶妙物。皆共遙散娑婆世界。所散諸物從十方來。譬如雲集變成寶帳。遍覆此間諸佛之上。于時十方世界通達無礙。如一佛土。爾時佛告。上行等菩薩大眾。諸佛神力如是無量無邊不可思議。若我以是神力。於無量無邊百千萬億阿僧祇劫爲囉累。故說此經功德。猶不能盡以要言之。如來一切所有之法。如來一切自在神力。如來一切祕要之藏。如來一切甚深之事。皆於此經宣示顯說。是故汝等於如來滅後應一心受持讀誦解說書寫如說修行。所在國土。若有受持讀誦

## 6 中世の出土埋納銭

### (1) 上田市内と下郷地区出土の埋納銭

中世には各地に市が開かれ、地方にも貨幣経済の浸透がみられる。中世の日本では銅の産出量が少なく、貨幣の鋳造は行われず、大量の中国銅錢を輸入して通貨として流通させていた。上田市内では鎌倉時代から室町時代に使用された中国銅錢が各所から出土している。過去の文献に記されたり、発掘調査で旧上田市内から出土した事例は別表（文献 31）の通りである。

この他に真田地域では、山家の真田氏館跡推定地より開元通宝から永樂通宝など 51 種類、1,804 枚の中国銅錢が昭和 22 年頃に出土した。また平成 6 年には下原の出早雄神社参道脇地点から 33 種類、合計 273 枚の中国銅錢が出土した。丸子地域では、勝越の寺開上遺跡から昭和 30 年の県道拡幅工事に際して約 3,000 枚の中国銅錢が出土した。昭和 62 年の調査でも 68 枚の中国銅錢が出土している。銭種は開元通宝（初鋤年 621 年）から咸淳元宝（初鋤年 1265 年）まで 30 種類以上が出土した。

こうした中国銅錢が出土した地点は、土豪の屋敷跡や寺社の境内・周辺などに多くみられる。大量に地中に埋納した理由としては、「富である銭を盗難や危険から避けるために埋めた」、「当時神仏に銭を捧げる風習があり、壺などに入れて埋めた」、「銭の不足による銭の価値が上がることを期待して埋めた」などの説がある。

殿城下郷の宇神林地籍の畠から明治 36 年（1903 年）、灰釉四耳壺が発見され、その中に中国銅錢が六貫三四五匁（約 23.8kg）も入っていることが確認された。この重量から推定して約 6,800 枚の銅錢が納められていたと考えられている。しかし

現在までにその大部分は散失し、祥符元宝・皇宋通宝・景德元宝など 19 枚が現存しているのみである。

銅錢が入っていた灰釉四耳壺は、高さ 35.5cm、口径 11.0cm、胴部の最大径 23.0cm、重量が 3.75kg であった。淡緑色をした、木灰を主成分とする灰釉が施され、ほぼ完全な形をとどめている。肩部に四個の耳（環状のツマミ）が付けられた壺で、四耳壺と呼ばれている。この壺は瀬戸地方で焼かれた陶器で、古瀬戸に分類され、製作時期は鎌倉時代中期と推定されている。

四耳壺は当時、骨を納める蔵骨器として多数使用された。この壺は古瀬戸の優品であり、中世の重要な陶器といえる。下郷の深区神社が所有し、



下郷地区出土の灰釉四耳壺  
(鎌倉時代中期)

現在当館で寄託・展示されている。



下郷地区出土の灰釉四耳壹内に納められていた中国銅錢

出 土 年 月	出 土 地	出 土 古 錢	文 獣
安永八年二月（一七七九）	大久保字平間 常田字欠上	古錢一三五〇枚 上田侯に献上 かはり錢八二五文 上田藩主差出す	小県郡年表 上田市史下
文化七・七（一八一〇）	中之条字親音堂	古錢（数量不明）近くに壙の内あった）	小県郡年表
天保年中（一八三〇—）	中之条字親音堂	唐錢（瓶入）開元通宝・永樂通宝など五〇種類	小県郡年表
明治七・八（一八七四）	上鹽尻 馬場武吉氏宅地	中國錢五三九五枚 開元通宝・咸淳元宝 最多元祐通宝七一〇枚（陶器査入）	長野県考古学全誌7号
明治二八・（一八九五）	殿城下郷神林	中國錢六八〇〇枚 灰釉四耳壹に入れて 重さ六貢余（二三ヶ余）一九枚を残し殆ど失な れでいる（入保御堂あつた）	上田市史下
明治三六・四（一九〇三）	殿城	古錢九貢余 計一六貢余 九七一二枚 更に七貢掘り出す 字体不明なるも悉く中國古錢	上田市史下
明治三七・三（一九〇四）	常田字塙の内	唐錢一貢余一万二千枚余（壙掘り行っていた）	上田市史下
大正一三・二（一九一四）	神科若門 塙東前山	開元通宝・永樂通宝 唐錢九貢余 一万枚余 開元通宝・永樂通宝	上田市史下
昭和一二・（一九四七）	手塙字皇子塙	中國錢六四七枚 開元通宝・永樂通宝	塙田城その歴史と発掘
昭和四九・五（一九七四）	塙田城跡	中國錢五七枚 開元通宝（寛永通宝）	皇子塙発掘調査報告
昭和五〇・七（一九七五）	保野字中井	中國錢一〇〇枚ほど 開元通宝・永樂通宝	塙田城その歴史と発掘
昭和五五・七（一九八〇）	岩門字諱方町	中國錢五枚 開元・皇宗・治平各一枚不明二枚	中井遺跡発掘調査報告
昭和五七・九（一九八二）	常盤城字殿田	中國錢七五七一枚 開元通宝・永樂通宝五二種類	上田盆地三四号
平成四・（一九九一）	住吉字宮平	元祐通宝一枚	殿田遺跡発掘調査報告
平成五・七・（一九九三）	栗地字浦田	中國錢四五枚 開元通宝・永樂通宝	官原遺跡発掘調査報告
平成八・四（一九九六）	北宋錢二三枚 祥符元宝 皇宋通宝	浦田B遺跡発掘調査報告 告	官原遺跡発掘調査報告
平成九・（一九九七）	秋和字宮原	開元通宝一枚	官原遺跡発掘調査報告

旧上田市内出土の古錢（文献31より引用）

## (2) 岩門地区出土の埋納錢

昭和 57 年、上田市岩門の字源方町から造成工事中に中国銅錢が大量に出土した。調査をして錢種が判明したものは開元通宝から永樂通宝まで 52 種、6,128 枚に及び、不明のものを含めると 7,572 枚（文献 32）にのぼった。

出土状況は一束ごとに麻ひもの縫（錢の穴に通したひも）に通され、埋納錢としてまとまった状態で出土したが、古錢を入れた容器は不明であった。数量の多かった中国銅錢は皇宋通宝が 650 枚、<sup>こうそうつうぱう</sup> 元豐通宝が 623 枚、<sup>えいほうつうぱう</sup> 永樂通宝が 575 枚、<sup>えいりょうつうぱう</sup> 元祐通宝が 543 枚、<sup>まねきつうぱう</sup> 熙寧元宝が 505 枚、開元通宝が 482 枚などである。なお、開元通宝は唐代に発行され初鑄年は 621 年であるが、唐代を通して鑄造され、後の南唐（鑄造年は 960 年）などでも製作されている。

こうした古錢は表面の仕上がりが良好で、裏面の外縁や内郭の段も明瞭であり、国内で生産された粗悪な模製錢とは異なり、中国からの渡来錢の可能性が高い。岩門地区には中世の地元有力氏族の居館跡があり、これとの関連も推測されている。

No	錢貨種類	枚 数	%	発行国	初鑄年	No	錢貨種類	枚 数	%	発行国	初鑄年
1	開元通寶	482	7.82	唐	621	28	聖宋元寶	194	3.1	北 宋	1101
2	乾元重寶	22	0.36	唐	758	29	大觀通寶	59	0.96	北 宋	1107
3	唐闕通寶	3	0.05	南 唐	959	30	政和通寶	233	3.80	北 宋	1111
4	宋通元寶	25	0.41	北 宋	960	31	宣和通寶	23	0.38	北 宋	1119
5	太平通寶	50	0.82	北 宋	976	32	紹興元寶	1	0.02	南 宋	1131
6	淳化元寶	69	1.13	北 宋	990	33	淳熙元寶	22	0.36	南 宋	1174
7	至道元寶	93	1.52	北 宋	995	34	紹熙元寶	9	0.15	南 宋	1190
8	咸平元寶	92	1.50	北 宋	998	35	慶元通寶	9	0.15	南 宋	1195
9	景德元寶	115	1.88	北 宋	1004	36	嘉泰通寶	3	0.05	南 宋	1201
10	祥符元寶	142	2.32	北 宋	1009	37	開禧通寶	3	0.05	南 宋	1205
11	祥符通寶	75	1.22	北 宋	1009	38	嘉定通寶	19	0.31	南 宋	1208
12	天禧通寶	128	2.09	北 宋	1017	39	紹定通寶	7	0.11	南 宋	1228
13	天聖元寶	275	4.49	北 宋	1023	40	端平元寶	1	0.02	南 宋	1234
14	明道元寶	24	0.39	北 宋	1032	41	嘉熙通寶	1	0.02	南 宋	1237
15	景祐元寶	69	1.13	北 宋	1034	42	淳祐元寶	7	0.11	南 宋	1241
16	皇宋通寶	650	10.61	北 宋	1038	43	嘉定元寶	4	0.07	南 宋	1253
17	至和元寶	45	0.73	北 宋	1054	44	景定元寶	3	0.05	南 宋	1260
18	至和通寶	17	0.28	北 宋	1054	45	咸淳元寶	3	0.05	南 宋	1265
19	嘉祐元寶	51	0.83	北 宋	1056	46	正隆元寶	13	0.21	金	1157
20	嘉祐通寶	78	1.27	北 宋	1056	47	大定通寶	10	0.16	金	1178
21	治平元寶	98	1.60	北 宋	1064	48	至大通寶	6	0.10	元	1310
22	治平通寶	11	0.18	北 宋	1064	49	天定通寶	1	0.02	天 完	1359
23	熙寧元宝	505	8.24	北 宋	1068	50	大中通寶	7	0.11	明	1361
24	元豐通寶	623	10.17	北 宋	1078	51	洪武通寶	371	6.05	明	1368
25	元祐通寶	543	8.86	北 宋	1086	52	永樂通寶	575	9.38	明	1408
26	紹聖元寶	193	3.15	北 宋	1094		不明 錢	1444			
27	元符通寶	66	1.08	北 宋	1098		合計	52種	7572		

上田市岩門出土錢寶一覽（文献 32 より）



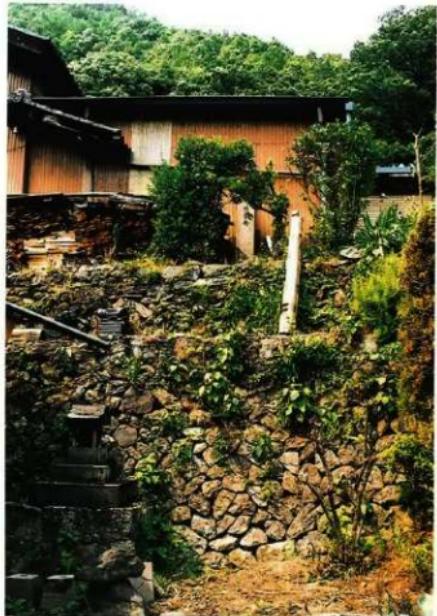
上田市岩門地区出土埋納錢

### (3) 塩尻地区出土の常滑大壺と埋納錢

上田市上塩尻の馬場家屋敷から明治 28 年、建物を新築する際に地下約 1.5m の地点から大型の壺と大量の中国銅錢が発見されて注目された。壺は直立した状態で発見され、壺の口には平石で蓋がされていた。この壺は常滑焼（愛知県知多半島一帯で製作）に分類される大壺で、高さ 48.4cm、最大径は 45.2cm である。口の部分は縁帶が幅広く肩部が張って、中世特有の形状をしており、13世紀後半から14世紀代の製作と推定される。

この中から発見された中国銅錢（文献 33）は、5,395 枚にのぼり、このうち錢種が判明した古銭は 1,691 枚であった。その種類は中国唐の開元通宝（初鋳年 621 年）から南宋の咸淳元宝（初鋳年 1265 年）まで 38 種類に及んでいる。特に数の多い錢種は開元通宝が 150 枚、皇宋通宝（北宋・初鋳年 1039 年）が 139 枚、元豐通宝（北宋・初鋳年 1078 年）が 125 枚、元祐通宝（北宋・初鋳年 1093 年）が 710 枚などである。

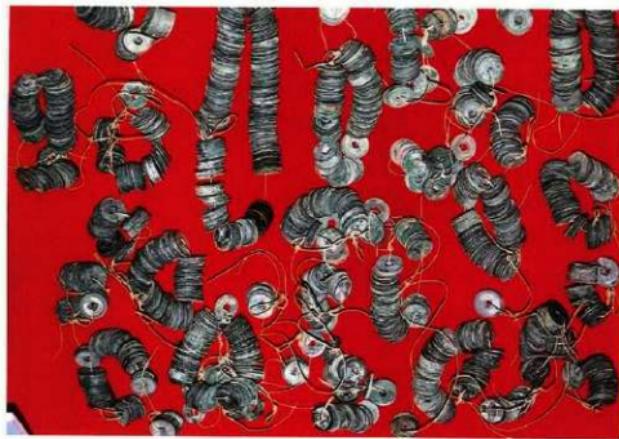
この塩尻地区の中国銅錢には永樂通宝などの明錢は含まれておらず、13世紀末頃から14世紀前半の、鎌倉時代後期から室町時代初頭の頃に埋納された銅錢と推定されている。こうした常滑焼大壺の埋納容器とともに大量の中国銅錢がまとまって保存され、出土状況が明確な事例は少なく、当時の社会を解明する上で貴重な資料とされている。



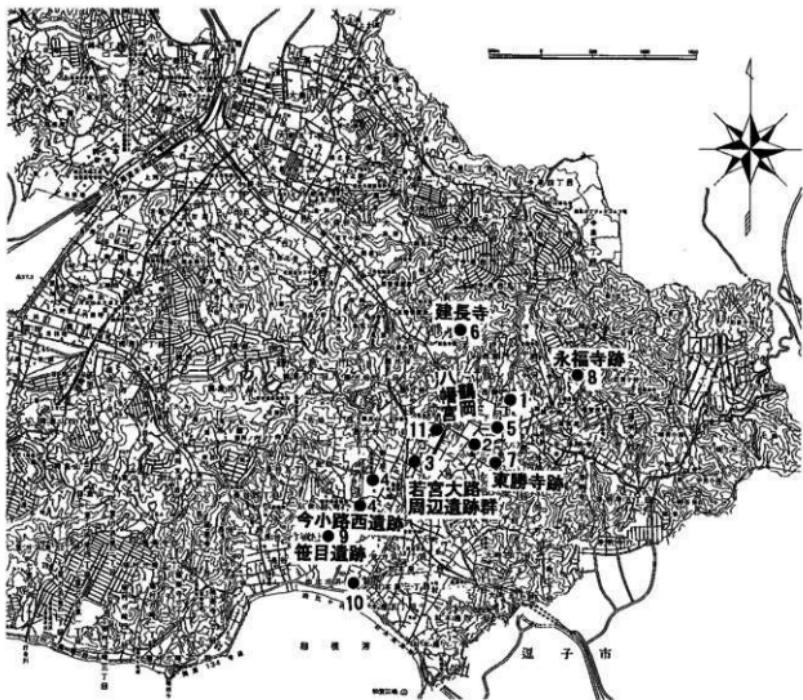
常滑大壺・埋納銭が出土した  
石祠右横の地点（馬場家）



常滑大壺（13世紀後半～14世紀）



馬場家屋敷から出土した中国銅錢



NO	遺跡・寺院名	6	建長寺
1	北条義時法華堂跡	7	東勝寺跡
2	北条高時邸跡	8	永福寺跡
3	若宮大路周辺遺跡群	9	笹目遺跡
4	今小路西遺跡	10	由比ガ浜中世集団墓地遺跡
5	大倉幕府周辺遺跡群	11	北条時房・頼時邸跡

主な特別展関係遺跡・寺院位置図（鎌倉市関係）

（鎌倉市教育委員会「鎌倉の埋蔵文化財 9」平成 18 年発行より地図を引用）

展示資料目録

No	資料名	点数	出土地	所有者
1	土器	5	鎌倉市今小路西遺跡 (古代)	鎌倉市教育委員会
2	須恵器	5	タ	タ
3	丸瓦	2	タ	タ
4	平瓦	1	タ	タ
5	軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦	17	上田市信濃國分寺跡 (古代)	信濃國分寺資料館
6	円面鏡・青磁	3	タ	タ
7	青磁割花文碗	1	鎌倉市大倉幕府周辺 遺跡群	鎌倉市教育委員会
8	渥美壺	1	タ	タ
9	鉢 (三鰐)	1	タ	タ
10	銅鏡	1	タ	タ
11	瀬戸水注	1	鎌倉市若宮大路周辺 遺跡群	タ
12	版木	1	タ	タ
13	瀬戸黒釉壺	1	鎌倉市今小路西遺跡	タ
14	水滴	1	タ	タ
15	八葉複弁蓮華文軒丸瓦	1	鎌倉市永福寺跡	タ
16	八葉複弁蓮華文軒丸瓦	1	タ	タ
17	均整唐草文軒平瓦	1	タ	タ
18	均整唐草文軒平瓦	1	タ	タ
19	写経石	1	鎌倉市新善光寺跡	タ
20	写経石	1	タ	タ
21	青磁魚文皿	1	鎌倉市藤内定員邸跡	タ
22	青磁算木文香炉	1	鎌倉市妙長寺裏遺跡	タ
23	白磁皿	1	鎌倉市北条時房・ 顯時邸跡	タ
24	瀬戸四耳壺	1	鎌倉市佐助ヶ谷やぐら	タ
25	遊戲具トンボ	1	鎌倉市佐助ヶ谷遺跡	タ
26	温石	1	タ	タ
27	箱 (温石入れ)	1	タ	タ
28	織り人形男	1	タ	タ
29	印判	1	タ	タ
30	褐釉双耳壺	1	鎌倉市由比ガ浜中世 集団墓地遺跡	タ
31	瀬戸入子	1	鎌倉市長勝寺遺跡	タ
32	地鎮具白磁皿	1	鎌倉市笹目遺跡	タ

No.	資料名	点数	出 土 地	所 有 者
33	地鎮具白磁水注	1	鎌倉市 笹目遺跡	鎌倉市教育委員会
34	地鎮具天目茶碗	1	タ	タ
35	地鎮具銅製鏡子	1	タ	タ
36	瀬戸入子	1	鎌倉市長勝寺境内	タ
37	瀬戸水滴	1	鎌倉市淨明寺福荷 小路遺跡	タ
38	瀬戸合子	1	タ	タ
39	常滑壺	1	鎌倉市宮ノ前遺跡	タ
40	かわらけ	1	鎌倉市円覚寺門前遺跡	タ
41	銅鏡	1	鎌倉市横小路周辺遺跡	タ
42	銅鏡	1	鎌倉市北条時房・ 頼時邸跡	タ
43	硯	1	鎌倉市千葉地遺跡	タ
44	硯	1	鎌倉市北条氏常邸跡	タ
45	まな板	1	鎌倉市諫訪東遺跡	タ
46	刀子	1	鎌倉市内遺跡出土	タ
47	一遍上人絵伝（模本・写真）	1		東京国立博物館
48	源頼朝下文（歴代龟鑑・写真）	1		東京大学史料編纂所
49	大覚禪師語録（複製品）	1		建長寺
50	開山大覺禪師像（写真）	1		タ
51	蘭溪道隆禪師尺牘（写真）	1		タ
52	蘭溪道隆禪師尺牘（上田市指定文化財）	1		安楽寺
53	樵谷惟惣禪師墨跡	1		タ
54	安樂寺八角三重塔斗	1		タ
55	安樂寺八角三重塔尾垂木	1		タ
56	安樂寺八角三重塔礎盤	1		タ
57	安樂寺八角三重塔模型	1		タ
58	信濃国分寺三重塔水桶	2		信濃国分寺
59	信濃国分寺三重塔九輪	1		タ
60	信濃国分寺三重塔擦管	2		タ
61	信濃国分寺三重塔請花	1		タ
62	信濃国分寺三重塔部材	4		タ
63	中国銅錢	21	上田市築地・浦田B遺跡	信濃国分寺資料館
64	青磁壺形合子	1	タ	タ

No	資料名	点数	出土地	所有者
65	青磁碗	3	上田市築地・浦田B遺跡	信濃国分寺資料館
66	青磁蓮弁文碗	1	タ	タ
67	珠洲壺	3	タ	タ
68	珠洲瓦質擂鉢（すりばち）	1	タ	タ
69	常滑壺	4	タ	タ
70	青磁	6	上田市前山・塩田城跡	タ
71	白磁	4	タ	タ
72	青花（磁器）	3	タ	タ
73	美濃系陶器	4	タ	タ
74	土師質小皿	5	タ	タ
75	陶器片（スタンプ状文）	2	タ	タ
76	内耳土器	4	タ	タ
77	陶製大甕片	1	タ	タ
78	将棋駒	1	タ	タ
79	人形（ひとがた）	1	タ	タ
80	漆椀片	4	タ	タ
81	木製耳盞（みみだらい）	1	タ	タ
82	木製品（棒状・板状）	18	タ	タ
83	金箔押木製品	1	タ	タ
84	金粉付着土片	1	タ	タ
85	小柄（こづか）	4	タ	タ
86	刀子（とうす）	1	タ	タ
87	刀装具	4	タ	タ
88	鉄鎌	1	タ	タ
89	中国銅錢	23	タ	タ
90	鑿（のみ）	2	タ	タ
91	錙	1	タ	タ
92	フイゴ羽口（はぐち）	2	タ	タ
93	鉄釘	1	タ	タ
94	鉛玉	2	タ	タ
95	硯	5	タ	タ
96	砥石	3	タ	タ

No.	資料名	点数	出 土 地	所 有 者
97	五輪塔地輪	1	上田市前山・塙田城跡	信濃国分寺資料館
98	中国銅錢	16	上田市殿城・法楽寺遺跡	タ
99	摺鉢片（すりばちへん）	6	タ	タ
100	金銅三尊仏・磬（けい）	2	タ	タ
101	白磁合子	1	タ	タ
102	青磁・白磁	4	タ	タ
103	かわらけ	4	タ	タ
104	常滑大甕片	1	タ	タ
105	古瀬戸天目茶碗	2	タ	タ
106	古瀬戸皿	1	タ	タ
107	青磁蓮弁文碗	1	上田市金剛寺御堂地籍	タ
108	土師質小皿	1	タ	タ
109	宝篋印塔相輪部片	2	タ	タ
110	宝篋印塔笠部片	2	タ	タ
111	鉄製鎌	1	タ	タ
112	土師質土器	1	タ	タ
113	土師質内耳土器	3	上田市金剛寺地区	タ
114	土師質香炉片	1	タ	タ
115	土師質土器	2	タ	タ
116	経石（多字一石経）	10	坂城町観音平経塚	長野県立歴史館
117	古瀬戸四耳壺	1	タ	タ
118	経石（多字一石経）	20	上田市手塚・東糸屋村経塚	信濃国分寺資料館
119	古瀬戸灰釉四耳壺（上田市指定文化財）	1	上田市下郷神林地籍	深区神社
120	中国銅錢	19	タ	タ
121	中国銅錢	500	上田市神科地区	信濃国分寺資料館
122	中国銅錢	5395	上田市上塙尻	馬場秀雄
123	常滑大壺	1	タ	タ
124	短冊・冊子	7	タ	タ
125	常滑三筋壺	1	上田市神科地区	信濃国分寺資料館
126	古瀬戸天目茶碗	1	上田市信濃国分寺跡	タ
127	鎧杖（しゃくじょう）	1	上田市国分地籍	タ
128	内耳鍋（ないじなべ）	1	上田市岡・山崎城跡	タ

### 引用・参考文献

No.	編著者	文 献 名	発行所	発行年
1	五味文彦	日本の時代史 8 京・鎌倉の王権	吉川弘文館	2003
2	黒板勝美	吾妻鏡第1~4(新訂増補国史大系)	吉川弘文館	1980
3	馬淵和雄	「今小路西遺跡」「歴史考古学大事典」	吉川弘文館	2007
4	今小路西遺跡発掘調査団	今小路西遺跡(御成小学校内)発掘調査報告	鎌倉市教育委員会	1990
5	田熊清彦	「東國の国府と郡家」『新版古代の日本』8 関東	角川書店	1992
6	山中敏史他	古代の官衙遺跡II 遺物・遺跡編	奈良文化財研究所	2004
7	上田市教育委員会	信濃國分寺一本編	吉川弘文館	1974
8	山崎信二	「平城京内出土軒瓦と信濃國分寺出土軒瓦」 「古代信濃と東山道諸国の中世」	上田市立 信濃國分寺資料館	2006
9	松尾剛次	中世都市鎌倉の風景	吉川弘文館	1993
10	鎌倉市教育委員会	鎌倉の埋蔵文化財 8 平成14・15年度発掘調査の概要	鎌倉市教育委員会	2005
11	石井進・大三輪龍彦	よみがえる中世3 武士の都鎌倉	平凡社	1989
12	河野眞知郎	中世都市鎌倉 遺跡が語る武士の都	講談社	1995
13	高橋慎一朗	武家の古都、鎌倉	山川出版社	2005
14	鎌倉市教育委員会	鎌倉の埋蔵文化財 9 平成15~17年度発掘調査の概要	鎌倉市教育委員会	2006
15	鎌倉市教育委員会	鎌倉の埋蔵文化財 10 平成17年度発掘調査の概要	鎌倉市教育委員会	2007
16	福田誠	「鎌倉永福寺の発掘庭園と経塚」 「中世の系譜東と西、北と南の世界」	高志書院	2004
17	鎌倉市教育委員会	鎌倉市二階堂国指定史跡永福寺跡 一国指定史跡永福寺跡環境整備事業に係る発掘調査報告書	鎌倉市教育委員会	2001・2002
18	松尾宣方・永井正恵	鎌倉考古風景	鎌倉国宝館	2004
19	小林康幸	「関東地方における中世瓦の一様相」 『神奈川考古』25	神奈川考古学会	1989
20	黒板周平・櫻井松夫他	上田小県誌 第一卷 歴史篇(二)古代・中世	小県上田教育会	1980
21	櫻井松夫・山極尚一他	上田市誌 歴史編(4)上田の莊園と武士	上田市誌刊行会	2001
22	今枝愛真	「建長寺」「国史大辞典第15巻」	吉川弘文館	1985
23	葉賀磨哉	「蘭渓道隆」「国史大辞典14巻」	吉川弘文館	1993
24	濱島正士	「国宝安楽寺八角三重塔と禪宗様建築」 『信濃の古代・中世の仏教文化と関係遺跡』	上田市立信濃国 分寺資料館	2005
25	上田市教育委員会	浦田B遺跡	上田市教育委員会	1999
26	川上元	「塙田城跡」 『長野県史考古資料編 主要遺跡(北・東信)』	長野県史刊行会	1982
27	上田市教育委員会	法楽寺遺跡	上田市教育委員会	2004
28	金剛寺区誌編集委員会	金剛寺区誌	金剛寺区誌刊行会	2003
29	若林卓他	「観音平経塚」 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘報告書21』	県埋蔵文化財 センター	1999
30	川上元他	「上田市東総屋村経塚出土の経石」「長野 県考古学会誌33」	長野県考古学会	1979
31	小池雅夫他	上田市誌 歴史編(5) 室町・戦国時代の争乱	上田市誌刊行会	2001
32	倉沢正幸	「上田市岩門字諏訪町出土銭貨」 「上田盆地34号」	上田民俗研究会	1995
33	関孝一	「長野県上田市塙尻出土の古銭」 『長野県考古学会誌7号』	長野県考古学会誌	1969
34	村上博優	塙田方丈 樹谷惟惣禅師概考	御龍洞院保存会	2000

安樂禪寺所藏

「蘭溪道隆書状」による消息

龍洞院東堂 村上博優

安樂禪寺所藏の「蘭溪道隆書状」は、

「道隆和南、今朝忽聆、首座已有它山之行、使人悚歎不已、繼於維那處詢其詳曲、乃云  
昨回巡諸寮請暇者、令促帰堂、此為其中有怠慢者、故欲警之、庶堂中不致蕭索、首座  
等係大頭首、況有疾、並不預此數、豈期堂司一例報示改、令首座發怒破夏而行、此是  
維那不明子細之咎、伏望、首座以末代叢林、為念、勿以此小事繫懷、今夕早々帰來、  
凡有所好即當面從、冗中不及詳布、幸丐 情察

五月廿日

道隆和南

仙兄 首座禪師

〔読み〕

「道隆和南、今朝忽ちに聆く、首座は已に它山の行有りと。人をして悚歎して已まざ  
ら使む。縹いで維那処に於て其の詳曲（詳細）を詢るに、乃ち云く、昨、諸寮を

巡るに因つて寮暇を請う者をして、帰堂を促さ令む。

此は其の中に怠慢の者有るが為に、故に之を警めんと欲す。庶わくは堂中蕭索を致さざらんことを。首座等は大頭首に係る。況や疾有り。並びに此の数に預からず。豈堂司の一例に報示するを改ためんことを期せんや。首座をして怒りを発し破夏して行か令む。之は是れ維那の子細を明らかにせざるの咎なり。伏して望むらくは、首座末代の叢林を以て、念と為し、此の小事を以て懐に繋ぐこと勿れ。

今夕早々に帰り来られよ。凡そ所好有らば即ち當に面従せん。冗中詳布に及ばず。幸いに丐う、情察せられよ。

五月廿日

仙兄  
首座禪師

道隆和南

【注記】和南 || 意訳は恭敬・敬礼・尊敬を捧げること。稽首、敬礼して口に唱える語。

首座 || 叢林（修行道場）では衆僧の中で首位に坐る者を云い、禪頭・首衆・上座・座元・立僧・第一座等の呼称が有る。前堂首座・後堂首座・立僧首座・名徳首座の四種が有る。禪林における九旬安居の一會期間に、上首に位置する役名。

頭首<sup>とうしゅ</sup>＝禪林では東序<sup>とうじょ</sup>（東側）の六知事と共に、西序<sup>せいじょ</sup>（西側）に位置して、首座<sup>しやくざ</sup>書記・藏主<sup>ぞうす</sup>・知客<sup>しき</sup>・浴主<sup>よくす</sup>・庫頭<sup>ことう</sup>〔禪苑清規〕の六頭首を云う。其の座位を頭首位とも云う。

堂司<sup>どうし</sup>＝禪林の六知事の一役の維那のこと。僧堂を司どり指導の責めに任じる故に云う。六知事は都寺<sup>つうし</sup>・監寺<sup>かんし</sup>・副寺<sup>ふくし</sup>・維那<sup>いのな</sup>・直歲<sup>じやくさい</sup>を云う。

安樂禪寺所藏の「蘭溪道隆禪師書狀」の宛て名は、仙兄首座禪師とされているから、明らかに樵谷惟僊禪師に宛てた書状であることは云うまでもない。

先の注記に述べたように、某寺の夏安居制中<sup>げあんごばちゅう</sup>に首位の首座の樵谷惟僊禪師が、僧堂の衆僧を總指揮する維那職<sup>いのなじょ</sup>が、制中の清規にそぐわない何等かの失態を行ない、意に添えかねた何かが生じ、遂に怒りを発して、有つてはならない樵谷首座は破夏<sup>はげ</sup>し、九旬安居の禁足<sup>きんそく</sup>を敢えて破り、制中を見限つて外出他遊するという、破天荒な事態を起した為に、首座の居ない結制は成り立たなくなり、堂頭<sup>どうとう</sup>の蘭溪道隆禪師は、

「之は是れ維那の子細を明らかにせざるの咎なり。伏して望むらくは、首座、末代の叢林<sup>そうりん</sup>を以て念と為し、此の小事を以て懷<sup>おもい</sup>に繫ぐこと勿れ。今夕早々に帰り来られよ。凡そ好所あらば、即ち面從せん。」と云わしめている。

樵谷惟優禪師は、名利名聞を求めず、榮達を求める事もなく、其の境涯は、所謂、信州に隠逸し、紅塵を踏まさること四十余載と云い、實に清廉潔癖にして、只ひたすらに禪の道に励んだ禪僧と見られるが、それだけに無準師範禪師・別山祖智禪師の禪風厳しさにおいて、時には法拳棒喝の禪機も経験し有つたことであろう、それだけに九旬安居において、首座位にありながら破夏をするに至つたことは、余ほど維那職の非法が腹に据えかねたに相違ない。

其の場所は東光寺であつたようと思えてならない。なお其の年次は、蘭溪禪師が文永年間末の妄讖に遭遇して、甲府に流された頃ではないかと思われる。

然し臆測を出ることはできない。

(本稿は村上博優氏の「承諾をいただき、村上博優著『塩田方丈 樵谷惟優禪師概考』平成十二年発行より、安楽寺所蔵の「蘭溪道隆書状についての論考を転載させていた  
だいたものです。また次頁の「相州鎌倉建長寺と信州上田別所安楽寺との関係年表」  
は、長年の研究成果に基づいて村上博優氏が作成したものです。」)